

人  
生  
の  
帰  
趣

ミオヤは私どもに日々のかて年々の衣物も天地の間にできるやうにして私どもなる子どもに弁当を与へ下さるのは五十年六十年間の人間てふ学校にて精神のうち聖なる徳をやしなひて私どもをミオヤのよつぎたるきよきみくにのぼることのできるやうにとの目的によりてかてを与へ給ふのでありますやう 人間界は聖なるところをやしなふ学校でありますぞ

## 人生の帰趣

人生の帰趣といふ講題の下に自己の所見を講説したいと思ふ。全体人生觀に就ては其所見は必しも同一ではないから人生を或は深遠に高尚に觀るあり。また淺薄に卑劣に思ふて居るもあらう。

初に人生帰趣の標準を定めんに(一)には宇宙の大法に則りて最終の目的歸処に向て進趣す。(二)には自己の伏能を有らん限り發展して向上的に生活す。初め宇宙の大法に則りて終局に到達すとは、吾人は一切の万物と共に宇宙の大法を離れては存在は出来ぬ。又宇宙の大勢力に依らずして帰着することは不可能である。又自己の本能に伏藏する性能を離れて自我を円満に發達すべき物ではなからう。自己の伏能を遺憾なく發揮して能ふ限り努力すべきが人生の本務であると信ず。宇宙の大法と自己の伏能の發達とは矛盾する物ではなく自然に合致するものと信ず。

然れば此二方面から此問題を解決いたすのである。此を要説せんに(初)に、

宇宙の大法に則り帰処を定めて之に向て進趣す。

宇宙の大法に則りて帰処に向て進行すとは古来宇宙には一切万物の存在に對して目的ありと云ふ説とまた宇宙万物は本自然律に依て器械的に行はれてゐるので別に目的ありといふことは認められぬと云ふ論と有る。

宇宙の深玄なる實に蒼天の無窮なる之を仰げば弥々高遠に之を觀ずれば益々玄深にて日月星辰は千萬年を通じて其軌を誤たずして運行し地には四時行はれ万物生ず。其秩序の能く整然たる規則の正しきこと造化の妙用得て測るべからずである。然るに世の唯物質のみ偏重せる學者達は宇宙に對する觀念は矢張唯物質的に見て居る。曰く宇宙万物は現象の中には精神と物質との二性と成つて居るものゝ其実體は物質の原子が自然の法に依て構造せられたる物である。故に天体の運轉も所詮は器械的に行はれてゐるに外ならぬものであると觀て居るもある。或神學者は之を弁じて曰く假令天体の

日月星辰の運轉の如きは器械的と見ても其器械を運轉せしむる何らかの器械の發明者  
また運轉手がなくてはならぬ。造化翁の模倣を為す人間の器械にしても器械は物自分  
で出来て自己が運轉して居るものではない。初に發明者がありて之を構造した技手  
が在つて運轉させて居るではないか。実に此広大なる宇宙の万物の構造者技師に対し  
ては唯全知全能の神として畏敬信服するの外ないかと論じて居る。

仏教では造化翁の神は立てざれども其と比例すべき宇宙の本体的存在者に対しては  
いかに立てられて居る哉といふに、仏教にては學說のみでは宇宙の實在を真如、法性  
第一義諦等の種々の語を以て表号して居り、宗教としては法身、毘盧舍那如来等の名  
を以て表して居る。

法身といふは天地万物に細大となく有ゆる法を統ぶる処の靈体であるから法身と号  
し、大靈中に無尽の性徳を具有している故に如来藏性と名く。一切万物は悉く如来藏  
性から自然の法則によりて生成して居る。

大法身は万物を産出する父の如くまた万物を養成する方からいへば母のやうにも見られる。然れば則ち吾人は吾等一切衆生の本源、宇宙の大靈体なる法身如来を号ぶに大ミオヤとして仰いで居る。一切の衆生は本来は大法身より生産せられたる者なれば終局に於てまた一大法身の本覺に帰着すべきが真理と見ざるを得ぬ。聖典に一切衆生は本法身より生じてまた法身に還らざるは無しと示されてある。

仏教も學説としては宇宙の大法に随順すると即ち法性の理に随ふと為す。之に逆違する故に生死に流轉して六道に迷没するので若し人法性の理に順ふ時は法性の本源に証入することが得られる。云ひ換ふれば人は本神より稟けた神性を有して居るから神の聖意に随順し神の真理に契ふときは神の国に入り神と共に在ることが出来るとの事なのである。更に云換れば人は本真如から出た物で在る。然るに真如に背きて居るか迷の凡夫である。若し迷を翻して真如と一致する時は即ち仏であると。

仏教の宗致は本来宇宙大法の本源なる真如から迷出したる衆生をして本の真如の都

に帰趣せしむるのが目的である。また仏法と云ふ法、其物が本の真如の淨きに還本せしむる契機である。仏教中に哲学的な聖道門と宗教的な浄土門との二門あれども所詮は宇宙の大真理の終局に到達させるのが目的である。それを成仏ともまた往生とも云ふのである。

釈迦尊一生涯の宣伝の所詮は一切の人類をして宇宙の大法に契合すべき随順すべき真理を啓示なされたのである。

仏法てふ真理は実を尅して論ぜば宇宙の大法である。大真理である。此真理を離れて宇宙の大法に入り大我を我有として真理に合ふ生存は出来ぬのである。宇宙の大法は天地万物の設備を以て一切衆生を生成するの理法を以て吾人を生成すると共に、一切衆生を真理の本覚に帰着せしむる大法は本然として宇宙に存在して永遠に変易することはない。

然れども其大法真理は一切衆生は無明に迷うて之を覚知することが出来ぬのである。

そこで宇宙の大法の権化として人仏釈尊が此世に出世なされたのである。釈尊は一切衆生が永恒の生命常住の平和に帰入する真理を自覚なされたのでまた此の自覚の真理を専ら一切の人類に宣伝なされたのである。釈尊は自ら宇宙の大真理を悟り而して一切の衆生を覚らしめたと共に覚行円満とて宇宙の大法に契合すべき行為を實踐なされたのである。

一切の衆生を永恒の生命真理の生活に帰入せしむべき処の仏法、大法は釈尊自ら構造したのではない。其大法は実に本然として宇宙に存在するのである。故に釈尊自ら示されてある「有仏無仏性相常住」と此の意は一切の人類を覚らしむる大法は本来宇宙の真理として本然に存在するもので仏が世に出るも其世に出ざるとも真理は常恒に存在するものであると。

然れども釈尊が世に出で之を開示して導引するにあらざれば衆生は此真理の光に遇ふことが出来ずして永恒に無明の生死に流転する外はない。例へば地球の運転はガリ



レオ以前から常然として運轉してゐたのであるが唯ガリレオに依つて人類に紹介せられたのである。かくの如く仏法てふ一切衆生を本覺の光明に還入せしむる真理は本然常住であるが釈尊に依つて一切人類に教示されたのである。故に教祖釈尊は宇宙大靈の人格現として一切衆生に人生帰趣の真理を教へん爲めに此世に出現なされたのである。法華經に「諸仏如来は一大事因縁を以ての故に世に出現し給ふ。謂ゆる衆生をして仏智見を開示して正道に悟入せしめんが爲に出現し給ふ」と。

由之觀れば宇宙の大法と衆生自己の靈性の開示とは自ら一致するものである。然れば即ち宇宙の大法の帰趣する處は一切衆生を永遠の本覺に帰着せしむるに在りとの結論なり。宇宙には大法を以て万物を規定すると共に大勢力ありて一切万物を劣等の状態より進化し向上せしめたる終局は永恒の大生命完全円満なる真善美の極に到達せしむる大靈力の存在を信ず。

宇宙の大勢力は太陽及地球等の万物の設備を以て一切の生物界を生成し原始生物極

小の生物よりして進化せしめて意に終局は永恒の大涅槃に帰趣せしむる性能なり。

宇宙一大能力が万物に対して一方には自然界の太陽及地球を以て一切の生物を生成し其生物が劣等の状態より漸次に進化し人類に至り人類も原始の人類より文明的人類に進みて或程度に至れば精神生活も発達し一面には大靈より一切の人類を精神的に一大光明に攝取して大涅槃の光明生活に入らしむる靈能あり。之即ち人生の目的である。

帰趣せしむる勢力は譬へば大法が自然界方面に太陽の光熱化を以て地上の動物また植物を化育する如くに一方には大靈は心靈界の太陽として智慧と慈悲と靈化の三能力を以て衆生の心靈を開発し靈化して光明の生活に入らしむ。如来が本願力を以て一切の人類を光明中に攝取し斯光に觸る者の心を罪惡の状態から聖められて清き人格と爲つて光明の生活に入らしむ此宇宙の一大靈力が人類を撮めて永遠の生命にならしむる目的である。宇宙には大法と大勢力とを以て一切衆生を生じまた一切の衆生を法則と

靈とを以て衆生を心靈的に眞善美の靈國に帰着せしむる目的がある。

(二) 自己の伏能靈性を開發して正當に生活す。

宇宙は大法と大勢力とに依つて一切衆生を攝取して光明中に生活し行爲させる性  
能あるとは已に弁じた。是よりは一切衆生即ち人生の帰趣の主体である各個々自  
らの伏能を可成的に發揮して正當に生活するが即ち目的となす。人生即ち自我は人間に  
は同じ人類の中にも文明と野蛮とでは甚だ程度が懸隔して居るけれども人生といふ意  
味に於ては同等である。又一層広義の人生とは一切の動物と其根底を一にして居る故  
に通じて衆生といふ。

一切衆生の伏能に就いて仏教には一切衆生悉有仏性とてすべて生物界を通じて仏性  
即ち仏となり得らるゝ性能を有つて居ると云ふ義に就ては二義あり。甲は人の性即  
伏能に仏と成り得らるゝ性能が本来具有して居るのを開發すと云ひ、乙は人の性は本  
來は罪惡のみで神の性は具有して居らぬ唯信仰に依て善化せらるゝ能は有つて居ると

云ふにある。前に依れば人には本来具有して居る靈性を開發しさへすれば自己が即ち仏であるといひ是は自証主義にて詳しく云はゞ自身本是仏にして煩惱なく自然師なく共自己に悟り得らるゝ本性は具有して居るからそれを開發すれば一大靈性と自己の靈性とが合一せられ自己を通じて宇宙の無限に接するのである。

乙の人の本性は罪惡許りであると云方は自己を唯現実の方だけを見て伏藏の根底を見ずして消極的の惡しき方のみを我となす主義である。

基督教にては人の性を肉と心に別けて人の肉性は全く惡のみで神の救に預るものでなく心は本は罪惡ではあるけれども神の精靈を感じれば救はるゝ性を有つて居ると云ひ仏教にも両主義がありて一は本来具有して居る仏性を開發する時に自己が即ち仏である云ふの一は我々凡夫は根本的に罪惡なので決定して墮獄する外なきものであるれ共如来の本願力に救濟せらるゝ故に如来同体の覺に為ることが得らるゝと云ふ。初のを自証主義後のを佗力主義とす。

此両主義は各一方づゝを主張するけれどもそれごとく全く分業的に発達したので実に人の性と能とはは両面を各自は具有して居る故に完全なる宗教は両主義を合一したる処にあり。

仏教に人の心性に仏性と煩惱との両面を有て居ると説て居る。仏性の方は人々具有するもまだ伏能である。喩へば鶏の卵子の様なものにて之を孵化して雛とせざれば鶏と為ることは出来ぬ。卵の中に鶏と成り得らるゝ性を有つて居るので外部から容るゝものではない。靈性は本来各自具有して居る。外界から仏性が容れらるゝものではないと。また仏性と共に煩惱といふ罪惡の性も有つて居る。此の煩惱は大靈の力に依て靈化せらる。即ち煩惱は菩提である。即ち高等なる道德心と成るのである。喩へば渋柿の実も能く乾燥して甘干と成れば渋味が変化して還つて甘味と成るが如くである。各自が本来仏と成らるゝ伏能を具有してゐると云ふに就いては釈尊が正覺を成じなされた時の話がある。それは釈尊が菩提樹下に於いて臘月八日の曉に無明生死の夢が

醒めて朗然として正覚の光が顕はれた。世尊が自ら正覚の眼が醒めてから御自分ながら従前の我を振り顧れば実に無明の睡の中に生死の夢を貪つて居たのである。而して見れば今自分の覚の眼が醒めた処で一切の人類は全く靈が眠つて人間生活の夢を見てゐる。彼等に対して何か力説して覚めた方の事を示したからとて決して信ずることは出来ぬ。夫よりは寧ろ覚めた序でに覚た方の涅槃界に安住するに如かじと謂ひなされた。然れども尚一步進んで考ふれば然でない。各自仏性を具有して居る之を開きて醒しさへすれば自分と異なることはない。

華嚴經に仏子一衆生として具するに如来の智慧あらざるものなく但妄想執着を以て証得せず。若し妄想を離るれば一切智自然智無礙智即現前することを得と。又曰く爾時如来普く法界一切衆生を觀じて而も此言を作し給ふ。奇なる哉奇なる哉此の諸の衆生云何が具するに如来の智慧あり。迷惑して見ず。我当に教ふるに聖道を以て其をして永く妄想を離れて自身中に如来広大の智慧が仏と異なること無きを得しめんと。

是れ自己の伏能を開発すれば仏と異なることなしと云ふことなり。

自己の伏能を開発して正當に生活すと云ふ眞義此処に在り。此靈性開發して始めて眞實の自我である。性を遂げ能を發揮したのである。喩へば杉の種子は至つて微少な物で之を解剖して見れば蛋白質や何かの極めて簡単な元素に過ぎぬ。然れども之を播いて培養宜しきを得れば四五丈も廻るやうな大きさと天を凌ぐやうな大木となる。吾人の仏性も杉の種子の如くである。現在の我は何の覚えもないけれども此仏性の伏能が円満に發揮した暁には一切の諸仏と同じく無限の光を以て一切の眞理を照し永恒の生命として大覺位にのぼり大涅槃常住となることが出来る性能を有て居る。

靈性はもと宇宙大法の本体なる法身より分出せられたる法なれど靈性開發は大法に順うて自我を充實せしめ生を充實し眞義を顯示してミオヤの全きが如く完きを求め眞善微妙の心靈界を顯示するにあり。

## 宗 教 的 人 生

二二

人生の帰趣を講ずるに吾人は宗教の見地から話すのである。故に宗教的主体としての人生である。先きに宇宙の大法に則る行為と自己の靈性を發揮する行為とは自づと自然一致するとは己に説明したり。宗教の關係は己のみにて成立するものにあらず。主体と客体の親密に合一する処に成立す。主体は即ち人にて客体は神即ち仏教の如來である。人の信仰と如來の恩寵との關係である。信仰とは己を獻げて歸命信賴することと恩寵とは人の信仰に対して慈愛心を以て愛念養成し給ふ親子的關係の如くである。通じて神と如來は宇宙大靈体の代表的人格現にして即ち大靈である。人は宇宙の一分子にて小靈である。大靈と小靈と合一する処また小靈が大靈の恩寵に依て開發靈化せられて闇と悩と罪の状態より明と安と善とに復活せらるるにあり。人が小宇宙とすれば如來は大宇宙大我である。大我より小我に對する力用を恩寵といひ小我が大我の



恩寵を仰ぎて同化せらるるが恩寵である。華嚴經に其因縁を明に譬を以て示されてある。譬は日光あり眼ありて能く物を見るが如く、仏日の光明は信心の眼ありて能く感合することが得らると。此兩者の最親密なる關係の処に宗教心が成立つのである。人の信仰と如来の恩寵との交渉に依つて宗教心は成り立つと云ふも、此れが説明は主体と客体との兩者のうちその一方より為さざるを得ぬ。

## 宗教的主体としての人生

如来は一切万物を産出する御親にしてまた一切衆生の最終の帰趣する処である。如来より生産せられたる万物は、尽く其子であつて如来の本國に帰着せざれば、竟に三界六道に迷没流転する許りである。一切衆生と共に此世界の一切國土も如来より發生せられし物にてあれば、竟には如来の本源に帰着すべきである。

人生と云ふは、只個人性のみではなく、人類は、尽く同一の本体より出でたるも同一類同

一種族のみではない。本同一の根底より出たるも其人類の祖先は一体より出でて漸々に親より子に枝より条に益々分れ出し広く世界中に弥漫し時間的にも子より孫に相続して数千万年に亘りて原始的人类より現在の人に至るまで相互の連絡は一の大樹の枝葉の如くに繋りて切り断つことの出来ぬ關係に血脉が連絡して居る。人類中に文明あり野蛮あり賢者ありまた愚者あり。又其稟けたる資質形相の如きは各々相異つて居る。五体また五官等の形より肉的生活精神の智力意志また氣質等は各々相同じからざるも人間式に構造せられたる上に於ては同一である。人類は四支五官五臟六腑等に至るまで全く同一型式で有りながら身体の大小の分量又其格好及び相貌より其的内的氣質に至るまで世界人類無数億の人間中に一人として内容形質に至るまで悉く特殊的に出来てをりて同一でない。いかに相貌の好醜内性の智愚賢不肖等の差別はあれども人生といふ資格は同一である。

人生より一層大なる団隊が在る、仏教の謂ゆる衆生性である。一切生物界を通じ

て同一の根底に出でて方面と程度とは殊にするも生物界に共通性がある。故に一切衆生悉有仏性として仏教では同一に見て居る。

人生の根本生命の本源を古来研究されてある。仏教に依て人生の根源をいかに説明して居るかに就て唐の宗密禪師は能く人生を研究され原人論を著された。今其大意を述べて見やう。

人生の根元に就ては儒道二教の説によれば人の本は近くは親である。親には亦親ありて大本は祖先である。其祖先も其本は天地陰陽から、陰陽二気も其大本は宇宙一大元氣である。一大元氣が自然の道法に依りて天地万物乃至人間が出来たのであるから一大元氣が万物の本源である。一大元氣が自然に漲りて万物を生じたのであるから終には自然の元氣に還るのであると。師は此等の説を詰つて曰く彼等は生物の原因結果の所以も研究せずして唯自然に生じ自然に還ると云ふ説は幼稚な説である。

故に人生の根元を生の内面生活の心識の方から原ねざれば分らぬ。其は仏教であ

る。同じ仏教と云ふても深淺が有る。

淺き小乗の説では人生の本源は業即ちカルマである。力である。此力の存在が善き方に向て働けば人間天上の身を受け悪きに働けば地獄餓鬼の生を受く。善惡の業が原因と為て苦樂の生を感ず。故に人生の本は業であると。然らば個々は業を本として生じたとすれば一切の個々が依止する世界は誰が造りしや。夫は各々の共同の業から共同の果として苦樂の世界を感ずるので詮ずる所共同業から造り出した世界である。何れにしても業が人世の根本といふが小乗教の説で尽理ではない。何となれば業が本體なれば業を為す物は誰か。体なき物に力用が有る筈はない。故により以上の權大乘法相家の説に依れば阿頼耶識と云ふ心的存在が万物の本源にて一切の身と心と世界との性を含蔵して居る不可思議な物にて吾人が五官として物を視、声を聴くも智情我を認むる心も外の日月星辰山河大地等と現象と觀て居る觀る心も向ふに觀ゆる物も一の阿頼耶識である。人類許りでない一切衆生尽く此識を本として存在する。之が生の本

体である。此識の存する限りは生は常恒に活動して六道生死の身と世界とを受けて居る。若し羅漢果を得れば生の本体が解脱して無為真空に帰元する。此識なるものは個々別々である。故に成仏出来得るのと出来ぬのとあると説くが之が法相家の義である。此説も終局真理ではない。一乗教によれば一切衆生心の体は仏性とも如来藏性とも名づけて個々の本体は絶対唯一の心性態である。故に自己の心性を開発すれば各々悉く是仏である。衆生は自己の本体自性清浄の本性を開顕せずして自ら迷て凡夫と為て居る。自己の本源は即ち全一の心靈体である。

仏教では衆生心の方から段々と遡りて本源に達すれば一大心性であると見て、儒道二教では生物生命を形氣として形氣の本源は天地の本源宇宙一大元氣と見て居る。

仏教では個々の本源は即ち宇宙全一の本体なので一大心靈である。儒道では個々の生命も形氣であつて其本源も宇宙一大元氣であると。此両教は自己の生命を個々として見ると宇宙全体の本体と見ると大に異なる如くなれども実には絶対の本体を甲は外面

よりし乙は内面よりして一体の両面觀に過ぎぬ。浅く外面より見ると深く内面より觀ずるのは人の精神生命を物質的に見ると心靈體と見るのとは洋の東西を問わず古來相迭に自己の受持を主張して真理として佗の觀る方を否定する。若尚一隻眼を開きて雙方を統觀したならば務て争ふ必要もない。然れども相互に分業的に研究すれば精密に極むるに便ならん。

儒道二教よりは西洋唯物派の論者本體論物質原子說などは最も精微な物である。更に相互に受持の研究について説明する處を暫く紹介せん。

## 生命の起源(現今生命起源の說)

人類の生命も人類よりは遡りて地球上に生物が発生したる起原に就ては世間の學者種々の臆説を下して居る。また生命を研究する學者が生命の原理を物質的化學的に説明し、原始の生命は炭素の化學作用から發生し、炭素は物質の精妙な物にて變化に富

み柔かにて弾力あり、酸素窒素水素と共に精の極なる物が化合して元形質が成り立つ。是の元形質が生命の本であると。

また或学説には生命は醗酵素を中心として構成せる一種の芽胞が生命を創造し発達し分化の基礎となりて眼耳等の一切の官能を統制し芽胞は生物を發する種の核即ち生命體である芽を發する胞此れが個體を決定するのである。核が触媒的物質が化学的に細胞が分裂に際し核が分れて二個の細胞の特性が卵の身体組織に移り核の細胞中に種種雜多に含有する細胞分裂の位に發達してから四支五官の特性に抽出されて身体の一定の部分となる。卵及び精虫無數の單位が組成要素の發育に際し触媒作用にて發生するので單位特質は根本芽胞内に存して發達したる有機となると云ふ様な臆説もある。

又ヘツケルは生命は自然力と全く異つた生氣なる一種の力が存在して居る特殊力が生命である。故に自然に發生するものでないかと思へば又生命も凡自然に發生すべき性の存在にて自然の結果に外ならぬと。然し自然の物質の精妙なる物が生命と成るの

である。或學説は自然の外に別に生氣てふ者が存在して其原因から生じたる生命ではない。自體物質全体が生命である。此は機械的に發生したる結果にて身體即ち生命である。身體を離れて生命といふ力の存在は認むる能はずと。亦併行論者あり精神と肉體とは相即不可離的に併行して居る故に肉體の變化は精神に及ぼし精神の變化は肉體に影響す。故に身心平行的に觀ずべく生命は一方に偏して觀るべからずと。

生物学又生理學的に生命を研究する其方から云はば人の生命の元理は物質的機械的化學的に説明し得らるるものと為る即ち凭うである。

自然界に物質的常恒流運の精氣がある。個々皆獨立す。之を電子とす。この電子に陰電子と陽電子との二氣あり。この両者は反對の氣であつて而も互に相扶合ひ此兩電子が結合して原子となる。そは一の陽電子が元因となり數多の陰電子が相縁て原子と成る。而して此原子を單位とする物質を元素と為す。

水素酸素等の諸元素が此なので又原子の結合に安定と不安定とあり。ラヂウムの如



き外圍を繞る陰電子を放ち出す。之を放射運動とす。元素の差別は原子を組織する電子の数によりて成る。次に原子が結合して安定する物を分子と爲す。是分子を單位と爲る物質の化合して分子が炭素化合したるものを元形質と爲す。又分子が結晶したものが即ち細胞である細胞は膠状の結晶物である。此が永く化合して同化と分解とが行はる。此即ち自發的運動と消化作用とである。此の如きの細胞が更に結合して一体と爲り初めて生物と爲るのである。

生物中動物系統中に最も高等に進化したのが人類である。人類の生命と爲る炭酸水窒の化合の元形質と云も又数多の分子が結合したので其分子を結合した其本は原子である。原子は精氣の電子にて其原形質分子は炭原子四五〇窒素一六六水素七二〇酸素一四〇硫黄六合して千五百の原子から成り立つてをると。原形質は不安定なる化合物の結晶であるから不斷に代謝作用が行はれて居る。また細胞は原形質の分解によりて種々の作用を爲し自發的運動と摂食的運動と消化作用と生殖作用融合作用等を営みて

居る。之を生活といふのである。此生活の過程を生命と云ふ。凭様な訳で人の精神と云物も実に不可思議なる自動機械に外ならないと。

人の精神生命を生物学又化学的に帰するものと想ふ学者の見解である。

是見解は生命の現象を物質として見る主義なのであるが、未だ此物理的・化学的の精神生命の根底には尚一層根本的原理の存在することを認めざる点に於て半面の真理たること疑ひなし。

## 生命の最深根底（一大生命の根底）

前の説に比較して尚一層根底を深く人の精神生命を研究する説によれば凭である。精神生命なるものは唯物主義者が唯物質の精妙なる物が精神また生命と為るといふ如きはまた生命の主体の何たるかを深く思索せぬ説である。

人には幼少より老年に至る迄統一の主体が存す。又生命の実質には自発的活動と統

一 的<sup>てきしゆたい</sup>主体<sup>い</sup>と有<sup>いう</sup>目的<sup>ちよくてきせい</sup>性能<sup>のう</sup>とを有<sup>も</sup>つて居<sup>ゐ</sup>る。唯<sup>ゆい</sup>物質<sup>ぶつしつ</sup>巧妙<sup>こうみょう</sup>なる結<sup>けつ</sup>合<sup>ごう</sup>の結果<sup>けつぐち</sup>とは考<sup>かん</sup>ふることが出来<sup>でき</sup>ぬ。生命<sup>せいめい</sup>の主体<sup>しゆたい</sup>なる自我<sup>じが</sup>なるものは唯<sup>ゆい</sup>物質<sup>ぶつしつ</sup>の化<sup>くわ</sup>合物<sup>がふぶつ</sup>に過<sup>す</sup>ぎぬとは思<sup>おも</sup>はれぬ。矢<sup>や</sup>張<sup>はり</sup>自我<sup>じが</sup>の本体<sup>ほんたい</sup>は宇宙<sup>うちう</sup>の一大<sup>だいはんたい</sup>本体<sup>な</sup>なので其<sup>そ</sup>れと連<sup>れん</sup>絡<sup>らく</sup>せる精神<sup>せいしん</sup>生命<sup>せいめい</sup>は一大<sup>だいいせいめい</sup>生命<sup>な</sup>との関<sup>くわん</sup>聯<sup>れん</sup>を断<sup>た</sup>つことは出来<sup>でき</sup>ぬ。

此<sup>この</sup>精神<sup>せいしん</sup>生命<sup>せいめい</sup>は実<sup>じつ</sup>に不可<sup>ふか</sup>思議<sup>しぎ</sup>中<sup>ちゆう</sup>の不可<sup>ふか</sup>思議<sup>しぎ</sup>なるものなので宇宙<sup>うちう</sup>全体<sup>ぜんたい</sup>が絶<sup>ぜつ</sup>对<sup>たい</sup>的<sup>てき</sup>一大<sup>だいいせいめい</sup>生命<sup>な</sup>で一切<sup>さい</sup>の個<sup>こ</sup>々<sup>々</sup>は同一<sup>どうい</sup>本体<sup>ほんたい</sup>より分<sup>ぶん</sup>産<sup>さん</sup>せられたる分子<sup>ぶんし</sup>であれば吾<sup>わ</sup>人は物<sup>ぶつ</sup>質<sup>しつ</sup>的<sup>てき</sup>結<sup>けつ</sup>合<sup>ごう</sup>の個<sup>こ</sup>体<sup>たい</sup>としては一<sup>わく</sup>惑<sup>せ</sup>星<sup>せい</sup>に寄<sup>よ</sup>生<sup>せい</sup>せる微<sup>び</sup>小<sup>せう</sup>生<sup>せい</sup>物<sup>ぶつ</sup>大<sup>だい</sup>なる宇宙<sup>うちう</sup>に對<sup>たい</sup>しては実<sup>じつ</sup>に果<sup>は</sup>敢<sup>か</sup>なき物<sup>もの</sup>なれども精神<sup>せいしん</sup>生命<sup>せいめい</sup>に於<sup>おい</sup>て絶<sup>ぜつ</sup>对<sup>たい</sup>永<sup>えい</sup>恒<sup>こう</sup>の大<sup>たい</sup>靈<sup>れい</sup>と連<sup>れん</sup>絡<sup>らく</sup>せる限<sup>かぎ</sup>りに於<sup>おい</sup>て宗<sup>しう</sup>教<sup>けう</sup>上<sup>じやう</sup>の欲<sup>よく</sup>望<sup>ぼう</sup>の對<sup>たい</sup>象<sup>しやう</sup>なる永<sup>えい</sup>遠<sup>えん</sup>の生命<sup>せいめい</sup>と常<sup>じやう</sup>住<sup>ちゆう</sup>の平<sup>へい</sup>和<sup>わ</sup>をも得<sup>え</sup>らるるものと信<sup>しん</sup>ず。

また吾<sup>わ</sup>人は自我<sup>じが</sup>の根<sup>こん</sup>底<sup>てい</sup>に絶<sup>ぜつ</sup>对<sup>たい</sup>大<sup>たい</sup>靈<sup>れい</sup>と連<sup>れん</sup>絡<sup>らく</sup>すると共<sup>とも</sup>に一切<sup>さい</sup>の個<sup>こ</sup>々<sup>々</sup>は内<sup>ない</sup>面<sup>めん</sup>の本<sup>ほん</sup>体<sup>たい</sup>に於<sup>おい</sup>て相<sup>あひ</sup>互<sup>たがひ</sup>に關<sup>くわん</sup>連<sup>れん</sup>して断<sup>た</sup>つことの出来<sup>でき</sup>ぬ関<sup>くわん</sup>係<sup>けい</sup>を以<sup>もつ</sup>て居<sup>ゐ</sup>ることは空<sup>くう</sup>論<sup>ろん</sup>に非<sup>あ</sup>らずして直<sup>ちよく</sup>觀<sup>くわん</sup>し得<sup>え</sup>らるる事<sup>じ</sup>実<sup>じつ</sup>である。

小乗仏教にては生命の主体なる我といふものを否定し無我を認む。五蘊即ち身と意との蘊集の細微なる意識が在りて前生より後生に相続するものとす。小乗有部の俱舍論に衆生が生死相続の状態を四有とす。(一)本有、生より死に至る迄。(二)死有、將に死せんとする一刹那を云ひ。(三)中有、此に死して未だ生せざる間を云ひ。(四)生有、將に生れんとする時に名づく。

此五蘊即ち色受想行識なる心と身とが初の生より死に至る迄の仮和合が死して中有の五蘊は微小にして見る能はぬ沓気である。故に沓を以て名づく。業力に隨て母胎に入る之をカララと云ふ。漸々に胎児が長養せられて母胎より出で生より老死に至り生死に輪廻する状態を十二因縁とす。十二因縁とは初に無明即ち煩惱である。煩惱の衝動から(一)行即ち善悪業に依て(二)識、六道の中何かの業識となる。(三)識が母胎に胎る時名色と云ふ名は識にて色は父母より受けたる卵と精子である。元形質と靈魂と和合した時を名色と名づく(四)六入、胎児が初発より眼耳鼻舌身意の形づくる間を六入と

云ふ。内触すでに十カ月間に胎児が漸々形つくりて外に出ても差支なき迄に成り初めて分娩せられるを触と云。児生れて未だ感覺出来ずして觸覚だけを感ずる間なり。(七)に受、小児が家庭や教育等の四囲の刺戟を受けて弥々人格を作るの準備を為す時代で(八)愛、十三四歳より後なり(九)取(有)生(由)老死とす。識。小乗有部の説によれば俗に謂ふ靈魂は羯磨即ち業である。三世に輪廻するとは即ち業の勢力が相續するので我心と身とは共に消滅す。雜一阿含に、諸の所有の色身若は細若は好若は醜若は遠若は近、当に観ずべし彼の一切は皆是死の法なり。受と想と行と識も共に亦復是の如し」と。此説によれば此身も意識と共に竟に消滅すと。若し心身共に消滅せば未来に業が如何に相續するか。そは中有の五蘊には細意識を有して居るからと云ふも未だ不了義たるを免れぬ。大乘唯識に至ては衆生の意識の上に末那と阿頼耶識の二識を立て一切の心意識を統て阿頼耶とす。個性の所謂靈魂を阿頼耶識と云。是は蔵と云ふ義にて蔵の中に一切の物を蔵むる如くに一切の法の種子を包蔵して居るのである。

本来阿頼耶識は分別したり意識したりする働らきはない。屬性の末那が現はると阿頼耶のことを我と分別し執着す。意識と共に善悪の業を相統するものは阿頼耶である。阿頼耶は本体で業は力用である。人が一代造りたる善悪の業は身と意識とが無くなつても業の勢力は阿頼耶の種子に有て居る。恰も杉の種子には解て見ても枝葉根茎とは見えぬけれども種子の成分には大杉と成る能を有て居る様なもので阿頼耶の業識に業種子として其の作用から結果を招くべき為の性分を有て居る。斯らの種子が阿頼耶の体に伏藏して其が因種と成て外縁を待つて又更らに新たなる身体を構成するので、然して其業と云ふも色心已外の存在ではない阿頼耶識の作用に外ならぬ。蓋し一切の業の種子は皆阿頼耶に伏藏して六道種々の身を受く。故に一切の個性の根底は阿頼耶の種子が持統の体である。此種子から芽発して末那分別の我執と現行し此の末那の我意の現行が亦阿頼耶の種子と為て種子から現行を生じ現行の因が業を結果して種子と為り斯の如く展転して生死極まりなく阿頼耶の業力は常恒流転して止まず羅漢果

を得て解脱する時に初めて解脱す。

また仏となる時には識は転じて仏の四大智慧になる。

## 如来蔵と帰趣

尚ほ進みたる大乘に依れば、吾人衆生の心体は生滅と不生滅との和合即ち、如来蔵性で宇宙全一の心霊体とも云ふべき如来蔵性である。夫れが無明の悪習に薰ぜられて識の根底は絶対無限なれども、表面からは個体と為つて、個体の方より見れば、生滅流転し其の根底は如来蔵、不生不滅の体となる。大海の水と波の如くである。起信論に自性清浄心が無明の風に依つて動じて染心と成る等と。その意は本と宇宙全一の大心態が動きて、小我分裂の識と為るので、大海水は本と一体なれども波浪を起す、即ち個々と現はさるるが如くである。

之真如は随縁して方法を作る。方法と為つた方から見れば、種々に転変すれども、

本態からは常一である。然り之に依て見れば、人生と云ふ一切衆生の浪は、一大真如の大海に起るに外ならず。宝性論に無始世より本性ありて諸法の依止と作る。性に依つて諸道及涅槃の果を証するとあり。此の意は宇宙には無始より一大心性がありて、それが一切万有の本体と為つて居るので六道の衆生と成るのも、また諸仏の常住涅槃を証するのも、本は同一の心性であると云ふことである。

尚ほ進で円教に依れば性海円明、法界縁起、無碍自在、一即一切、一切即一、主伴円融と、故に十心を説いて無尽を顯はすと云ふ。心は、

人生の吾人の心源は一大心靈が本なれど、あらゆる世界に現はれたる万物と離れぬ關係を有つて居るので宇宙間に現はるる万有の本体は同一の大靈なので、現出した上には、悉く無尽の性と相とに分れて、而して万物が相互に關係を有て居る。万有が相互に非常な複雑なる關係を以て、因縁因果關係は重々無尽である。故に国土にも一切動植物の性相も作用にも無尽に變現して異つて居る。



此の理から敷衍せば生物の本体は一大心靈にて其体には無尽の性と相と力を有て居るから、其の働きから、宇宙の無尽の国土も生じ、国土の上に無尽の衆生を生ずるは一大心靈の為なので、無尽に現ずる性を以て、複雑因縁にて生物も原始的より向上するので、自己の内性に向上しやうとする性能がありて、外の相互の關係からして益々生物の種々に分派し進化し原始の生物から無数の階級を経て人類に進化し人類も無尽な因縁に依り各々個性を特殊的に發展し人類は心的にも無尽の因縁に依りて悉く特殊の個性を為す此人類にて、本、大法身から生じたるものにてあれば、還た本の一大法身に還るべき性を具して居る。此の本源に還る法が即ち仏法である。仏陀生涯に在りての宣伝する処、此処に在り。

万有が複雑なる因縁を以て居て成立て居ることは、華嚴經の重々無尽の説を借用するが宜しい。人の心に種々の性が有つて是が因縁に依りて、迷ひて六道の衆生となり悟りて四聖法界と成り、而して人生最終に帰趣する処は、十界の中、独り仏界のみで

ある。故に一切衆生は悉く仏性ある故に仏法に依りて成仏する。即ち之が終局である。

## 生命の二面

人生の個々主体なる人間広く云はば一切生物の心に、心は生命の体であるその衆生の心に仏教で二面ありと説く。即ち心生滅と不生滅との二面離れぬ関係を有て居る。起信論には心の生滅する方と不生滅の方との和合せる吾人の心を阿梨耶識と名づく。一体なれども生滅の方を阿頼耶識と云ひ不生滅の方を如来蔵と名づく。然して生滅の方を以て我と認めて其根底たる永恒不滅の自我の本体を自覚せざるを凡夫と為す。仏教では自己の精神生命の本源なる永恒不滅の心性を発見して無量寿と合一するのが目的である。

生滅の方に又二面に分けて研究せらる。一は有機生命、他面は識心なり。甲は人を

形の方から見生理的生命の体なる我とし、乙は心識、謂ゆる靈魂又は業識にて説明す。

人間は一切の生物と共に生滅するも、生滅に一期の生滅と念々生滅とある。一期とは人が生れて一生涯に亘つて一定の時間中に生活活動し然して此生活の働きある間を生と云ひ終りに其働きの終止するを滅と云ふ。念々生滅とは此身体も精神も共に細胞組織の働が新陳代謝して止む事なく此肉体を為す細胞が一度働く時は又旧くなつて新しき營養から交々に代りて已に生活を失ふたのは活けるものと交替し刹那に生滅して居る。精神生命に於ても亦然りである。心と云ふものは何時でも常住なものではない。火の炎々として水の殷々たる如く須臾も休止する事なく生滅して居る事は実験心理の方より見ても又相互に日々の心意の働きの上から見ても実に微細な活動に生滅変化しつ々ある事は事実である。故に仏教に人間一日一夜の中に八億四千の念あり其の念々の心の働きの善なり又悪なりの業作が三悪道又は三善道を造作しつ々有るのであ

ると。又生滅の微細な事は実に一秒間に何万と云ふ程の過程を成して居る。又一日一夜寤寐の中にも生と滅と云ふ事が出来る。朝に眼より覚めたるが心の働きの生なので一日活動して而して夜分に眠に就く時が一夜の精神意識の休む時で即ち滅である。其の一日一夜を数万累ねて身心全部の生活活動の休養期に為りて永眠する時は是一期の滅である。朝に起きて働いては又夜に眠る。寝ては起れば又眠る。其れを今少し引き延して生ずれば又死し死すれば亦生る。生滅変化が有為轉變の浮世の掟。例へば庭園の芝生が陽春の氣に為ると縁の芽を生じ繁茂して冬期には枯槁して死し了り春は新たに生れ冬は又死して了ふ様に外面よりは見ゆるが、然れども其地中の芝の根の方は矢張り十年昔から生滅せぬ生命を有して居る。其の如く衆生の生命が全く生滅すると見ゆるは外部から見ゆるので其精神内面には永恒不滅の生命を根として居る。古来人生を觀ずるに一体に両面を有て居る中に唯外面から生滅する方面を以て全体と認めて居る学者あり又深く自我の根本に立ち入つて自我の精神生命の本体は永恒存在の如来藏

性宇宙全一の生命と一体不二、不二にして全く二面ある事を覚らしめ此方面より人生を説明する学者あり。吾人は一体二面、不離不異の説に左袒するものである。

## 生命は一体

地上に発生したる生物生命に於ては一切生物界を通じて同一の起源より出でたと云ふも敢て矛盾はしない。吾々の生命は世界的生命の一部にて人類の祖先より尚遡りて生物原始の生命にまで連絡して居る。原始の生物は極めて単純な細胞に生命が有て其を保護する処の外包なる細胞自体がある。而して外包なる自体は保護し且つ働く為には必要なれども生命は原形質に在て之を子々孫々に連綿し嗣続して死なぬ部分がある。即ち生殖細胞である。父母の細胞が合体して新生命を宿して根本細胞と爲る。夫が即ち動物及び人間生命の根本である。人の生殖細胞に宿れる生命が横には広く枝から条をなして弥漫し堅には千万代に嗣続して極りない。之に由つて観れば生命の宿る

細胞は一体から無限に分身して居るが然も其一つの生命が一体から分れて生命が進化して人類の生命の如きまた外胞なる細胞組織もまた非常な複雑な状態と為つた。世界上一切の生命は本一体の分身にて各自は一分を我生命として居る。若し之を大にしては宇宙の一大生命の一部が即ち一切個々の生命である。一切の個々生命を合して宇宙の大生命である。吾人の身体生命が無数の細胞の聚合団体なるが如く宇宙は一切衆生の聚合団体である。

精神生命の二説は東西に亘り数千年に亘りて唯物唯心主義とまた併行主義との三説は依然として行はれて居る。

人の意識が進めば進むに従つて其学説も益々精密に深遠に入れり。然れども唯物主義を以て精神主義を全滅することが出来ず。唯心主義を以て唯物論の根を断つことは不可能である。

生物生命の元素なる元形質は親の元形質から子の元形質に分れ細胞は前の細胞から

来たので原始の生物生命は極少の元形質にて水中に生息せる無核虫の類である。此極少の虫は一個が二個と分れ二個が分殖して何を親とし子と云もできぬ。凭く転展して千万無量に分れて生存す。この極少の生物細胞が結合して高等動物の形体を組織する一切の動物乃至人間までも此細胞の聚合したる団体に外でない若し此細胞を原料として人間の塑式に容るれば人の形となる。又禽獸より草木に至るまでも細胞の和合上に様々の形式に形成したるに過ぎぬ。此細胞団体が始の単細胞から漸次に進化し腔腸生物と為れば分業を営み食物を取る物は消化を営むようになり即ち水母の類にて次に蛭ともまた蛇と成り数多の階級を経て高等動物の猴とも尚一層に進みて人類に至るも要する処同一細胞の仮和合上に種々無量の種類と形式とに組織せられたるに過ぎぬ。仏教に謂ふ四大仮和合を仮に人または衆生と名けたのである。

有核生物と為れば核は遺伝の決定素にて芽胞を構造したりまた成長させ又細胞活動の連鎖をなせる故に核は生命の住処である。核の外部は唯生命を扶助する外胞にて保

護の機関に過ぎぬ。生命は核に有るので、分殖するは核が二個に分る訳である。然る時は両方共に外包が出来るのである。

然して雌雄両性と別るるやうに成つては核もまた多数となりて各分業的に掌る処が定まる。生殖を掌る雌と雄との両方の核が相合して始めて一個の生命となる。夫が即ち父母の間に成たる子である。核は親の遺伝決定素を有ている。而して其子に伝ふ。そうすると子も又親と同じく外包に保護せられて核の生命を保存す。生命の坐所なる核は肉体を離れても子孫に分れて同一の生命を存続する。親に宿れる生命が元形質の核を以て子となり此核が長久の生命にて外包は幾億に替れども核の生命は永久に存続し有目的の如くに生物が進化する。原始生物の元形質に伏蔵する性能は代々に進化の務を以て居るやうに感じらるる。親の徳性は核中に含蔵して之を子に遺伝し核に有る文に外包の身体は構成せらるる。

人類に至つては核細胞中に種々雑多に篩込式に含蔵して精子卵子の合体が胎児と成



り種々の篩込から芽発し始め原始生物の虫的の形からまた芽が出で茎から枝と云ふやうに細胞の分裂の位が階級的に各々特殊的に抽出されて五体五官等の一定の部分と爲り親の生命及び外包が子と成り其本は一体の分身にして此分身作用からして世界中に弥漫して幾億万と成つたのである。

斯く科学的に生命を説明する臆説は種々あれども、然るに生命なるものは生物学的に或は化学的にのみにては説明し尽されざるものあり。炭酸水室の元素を調合し電熱等の分子を加へたればとて生命の原形質を造る事は不可能ならむ。生命は物質化合の結果として生ずることは不可能ならむ。物質方面のみの学者は生命の主体の何たるを考へぬ。が併し人は幼より老に至るまで統一の主体あり。生命の実質には自発的活動と統一の主体と有目的性とがありて唯物質の精妙の結合物とは想はれぬ。生命の主体なる我は唯化合物にあらず。矢張り本体は宇宙の真霊其ものである。吾人の生命は根底に於て連絡を断つ事は出来ぬ。生命は実に不思議中の不思議なるもの、宇宙全体の

絶対的<sup>ぜつたいてき</sup>生命<sup>せいめい</sup>なるものを立てて吾々<sup>われく</sup>個々<sup>こご</sup>は同一<sup>どうい</sup>の本<sup>ほん</sup>体<sup>たい</sup>より分受<sup>ぶんじゆ</sup>したるものと認めざるを得ぬ。故に一切<sup>さい</sup>の個々<sup>こご</sup>は互<sup>たがひ</sup>に連絡<sup>れんらく</sup>して断<sup>た</sup>ゆることの出来ぬ関係<sup>くわんけい</sup>を有<sup>いう</sup>して居る。

## 業識(生命の力)

人生<sup>じんせい</sup>の個々<sup>こご</sup>生命<sup>せいめい</sup>の主体<sup>しゆたい</sup>を内的生活<sup>ないてきせいかつ</sup>の精神<sup>せいしん</sup>の方<sup>ほう</sup>より説明<sup>せつめい</sup>せば仏教<sup>ぶつけう</sup>には自我<sup>じが</sup>即ち識<sup>しき</sup>を説明<sup>せつめい</sup>するに小乘<sup>せうじやう</sup>の浅教<sup>せんけう</sup>より大乘<sup>だいじやう</sup>教<sup>けう</sup>に至るまで階級<sup>かいかい</sup>あり。

大靈<sup>たいれい</sup>の分子<sup>ぶんし</sup>たる心性<sup>しんじやう</sup>を伏藏<sup>ふくざう</sup>する極少<sup>ごくせう</sup>の心生命<sup>しんせいめい</sup>を無明<sup>むみやう</sup>と云ふ。又業識<sup>まじふしき</sup>と名<sup>な</sup>け。又阿頼<sup>またあら</sup>耶識<sup>やしき</sup>と名<sup>な</sup>づく。此阿頼耶識<sup>このあらやしき</sup>を伏藏<sup>ふくざう</sup>する有機生命<sup>いうきせいめい</sup>は原形質<sup>げんけいしつ</sup>に存在<sup>そんざい</sup>する。之<sup>これ</sup>が極少<sup>ごくせう</sup>生命<sup>せいめい</sup>の体<sup>たい</sup>である。無明業識<sup>むみやうごふしき</sup>と云ふ活ける氣<sup>き</sup>を衝氣<sup>せうき</sup>と云ふ。即ち此氣<sup>すなは</sup>が活<sup>いき</sup>んと欲<sup>ほつ</sup>する氣<sup>き</sup>、此衝氣<sup>このしやうき</sup>業識<sup>ごふしき</sup>が生命<sup>せいめい</sup>の主体<sup>しゆたい</sup>であるから、自發<sup>じはつてき</sup>的に活動<sup>くわつどう</sup>し活<sup>いき</sup>んと欲<sup>ほつ</sup>する氣<sup>き</sup>がある。統一的<sup>とうてき</sup>自治<sup>じち</sup>体を為<sup>な</sup>す。又有目的<sup>またいうもくてき</sup>に活動<sup>くわつどう</sup>して居る。此蠕動<sup>このねんどう</sup>たる小物<sup>しやうぶつ</sup>生命<sup>せいめい</sup>力<sup>りよく</sup>に伏藏<sup>ふくざう</sup>して居る性能<sup>せいねう</sup>が進化<sup>しん</sup>の結果<sup>けつこわ</sup>は、人間<sup>にんげん</sup>の智力<sup>ちりよく</sup>、感情<sup>かんじやう</sup>、意思<sup>いし</sup>等の如<sup>ごと</sup>き又五体<sup>また</sup>五官<sup>ごわん</sup>の如<sup>ごと</sup>きも其<sup>その</sup>微少<sup>びせう</sup>の伏藏<sup>ふくざう</sup>から

進化したるに過ぎず。

生物衝氣は、活んと欲する意力。是の活んと欲する衝動力に貪瞋痴の三能力を有して居る。初めは嚮動的欲動的より進んで人間の意思と進化する。生物の活んとする目的には食物の營養の欲、種族保存を目的とする生殖欲、又身体の休息を要する睡眠欲これら生物の本能に有て居る。自己の生命保存の爲には自己の害に抵抗する力を憤怒とす。生の衝氣の目的に従ひ盲進するを痴と云ふ。意識的生活までに進まざる動物には本能的に貪と瞋と痴との力を以て生活す。食欲色欲睡眠欲は衝氣の目的を満足する故に快感あり。此の氣に違逆する境遇は憤怒防禦し敵し難き時は畏怖を感じ。皆無明業識の働なり。

## 靈魂の滅不滅に就きて

所謂靈魂の滅不滅に就ては世間に甚々敷問題である。

其靈魂の不滅の真理を諦に証明し得る法を講説すると云はば此真理を体得せぬ輩より見れば如何に思ふか知らぬ。然し此問題は今に初めての発見ではない。這般の大問題を一刀兩断に快断したるは吾が大聖釈尊である。抑聖者釈尊が入道の動機は斯の大問題である。彼れ王宮に在りて人間最幸福の榮を生れ乍ら受得るにも拘はらず、老病死を見て世の非常を悟り、熟ら惟みれば人世の果敢なき事実に夢幻の如し、老病死を免るるもの有らん。我如何にしてか人世の真理秘密の奥を究めて生死の源を明め永遠不滅の生命を発見し自ら度し且つ一切を度せんとの大願は彼悉達王子が人間の榮耀を顧みず独り超然として入山学道の志を奮起せし所以である。其志願を洩れ承れる臣下の族より諫め告る者あり曰く、太子よ、御発心の事に就ては古より或は死後の靈魂は無しと云ひ或は未来に滅せずと云ふ。未だ一定したる説なし。凭る未来の問題に苦んで現に受けつつある幸福を捨つるは可惜にあらずやと。太子曰く我は死後の有無の

問題に就て発心したるに非ず然れ共今現に我は生死の闇に捕へられたる奴隷たることは確かである。如何に生死の闇を破つて不滅の大光明を発見せんと云ふが我が志す所の目的である。若し永遠不滅の大光明を発得したならば一切衆生を同一の光明界に摂取せんと志願であると。彼が金剛の志は何人も止むるに由なく竟に奮然として王城を飛出し入山修行し、初めアララ等の老仙に解脱の道を問ひしかども未だ自己の理想を満足する能はず。独り自ら伽耶の深林に在りて鍛練苦行六年の後竟にヒバラ樹の下金剛座に端坐し四十九日禪那三昧に入りて一夜大魔王の内外より侵逼し来るを不動の念迅正に降伏し大雷強電の夕立の霽れ渡りたる後一層天月の清涼たるの感あり。臘月八日の明の明星仄かに出る時金剛座に入つて無始の無明朗らかに断尽し朗然として正覚の心光赫耀として普ねく十方三世を照して遺すことなし。焉に於て無明生死の源を尽し煩惱の根を切断し永劫常住の大般涅槃を証得し給へり。即ちは無上正等正覚を得たるなり。初めて生死の大問題を解決し不滅の真理を得たり。

仏陀自ら永遠不滅の大光明を得たる仏眼を以て一切衆生を視給ふて喟然として歎じて曰く、奇哉一切衆生自己と同じく一切智無師自然智本自具足して仏と異なること無し。我如何にして衆生の仏知見を開示して我と同じく不滅の聖者たらしめんと。抑此れ釈尊仏教を以て一切を度するの目的此処にあり。

今弁栄身を末世澆季に受く性拙く身劣るも靈性は同じく毘盧の分身なり。

旭日耀然として世を照す。戸窓開く処に、金殿玉樓の廊のみならんや仮令茅屋草廬たりとも窓の開く処に日光の射入する事何ぞ異らん。心靈開示し永遠不滅の大光明を我が同朋と共にせん事を希ふ。

## 心 靈 不 滅

今現在の自我即ち靈魂なるものは大宇宙の一分子たることは否定せられぬ。己を見れば宇宙と自己とは凭塵の關係をもつて居る哉を考へ見よ。我生命なるものが全体の

宇宙なくては生存も出来ぬと云ふ事も疑はれぬ。我等産出されたる分子に心靈あり生命ありとすれば況や其の産出す処の大親に大靈あり大生命なくてはならぬと云はざるを得ぬ。吾人は宇宙は絶対の大靈大生命であると云ふに憚からず。否仏教は盛に其真理を教ふるのである。之を法身ビルシヤナと云ふ。大なる宇宙は大なる如来である。産出する大御親の如来心と産出されたる分子の衆生心との区別と連絡を因に示せば

衆生心——相對的——生滅——有限——小我

如来心——絶対的——不生滅——無限——大我

衆生なるものは生れた者は必ず死す。故に生滅變化なる事は一般の実験する処、宇宙全体としては絶対なるものは無始無終にして過去も無際未来も無窮なれば小分子たる衆生の有限を以て宇宙の本体が滅するか不滅なるかは測り知る事能はず。絶対なるものには滅すと云ふ事は云はれぬ故に不生不滅と云つて差支ない。

絶対の大靈と分子なる小靈即ち人の心とは恰も水と浪との例の如く水は浪にあらざ

るも浪は水を離れては無い。外見すれば衆生は生滅の生物なれども本来不滅の大霊を離れて存在は出来ぬ。然らば生滅の衆生心と不生不滅の大霊とは其裏面に於て不可離の連絡を有つて居るに相違ない。カント等も云つて云る。吾人が僅か八十年の生命は永恒不滅の大生命の一分現象である。

吾人が心も仏教では如来蔵性と云ひ絶対無限の大霊を根底として居ると云ふのである。故に衆生心には生滅不生滅の二面が有る。一面より見れば生滅なれども其裏面の一方には不滅の大霊と連絡して居る。故に靈魂とは靈は不滅に名づけ魂は生滅の方に呼ぶのである。若し唯生滅の一方のみ見れば人は死すれば全く滅したと云ふも差支ないけれども其根底の一面には不滅の根がある。野の芝草が冬枯蔵まつて枯れた方は滅したけれども蔵まつて居る根底は生命をもつて居る。儒教などで人の魂魄は天地に稟けたる精気である。陽気が集まりて魂となり陰気が凝りて魄となり即ち活ける人の魂魄である。若し人死すれば魂魄は本の氣に分散す。故に遺る物なしと。蓋し草の枯た



る方から見たのである。又仏教にて地水火風空の本に還つてでも不滅の靈は存すと云ふは草の蔵まりたる根の方より云ふのである。何れも互に非難すべきでない。

吾人の心靈生命が意識的に生存せるは、宇宙の大靈の大電氣の連絡から吾人の意識生命と現れたる電燈である。八十年の間元氣能く燈つて竟に発電の連絡線が截たる時に意識的生命の明は消滅したるも宇宙の大靈電は永遠に滅せぬのである。

却説理窟は置いて实地に証明する処に真理の説明が立つのである。焉が仏陀五十年間専心誠意宣伝に力め給ひし道である。

要する処は生滅の小我と不滅の大我と精神的に合一する処にあり。此に就て二途あり。一は能動的に他は所動的である。甲は自心の最大根底なる如来心を自ら敢て開發して自己を空間的にも時間的にも飽く迄膨脹して絶対無限に至る自己心中の宇宙と為すのである。他は本来絶対の大靈は永恒本然自己は其分子なれば大靈を離れて我なし。我は大我の分子なれば我を大靈に投帰没入して忽ちに復活して大靈を本体と為し

たる我となる時に不滅の靈となる。甲乙入門を異にするも帰する処大小合一するは一  
致なり。

実相論的に衆生に生滅と不生滅との二種ある事を説かば、天台は実相論である。空  
間的である。先づ宇宙大靈の分子たる衆生心に本然として迷悟善惡十界の性能具さに  
具す。即ち衆生心に生滅する方と不生滅との両面ありて存す。然れども不生滅の仏慧  
の性本然有つて居り乍ら自覺せぬ故に生死に流転するものを迷の凡夫と云ひ、之を六  
道と云ふ。

彼等は不生滅の性を有つて居ても開示し悟入する事をせぬ故に唯生滅の方にのみ迷  
うて惑ひて業を造り業の勢力に縁りて生を享く。迷の中に於ても自ら因縁に随て善と  
惡との業に輕重ありて三惡三善道と分るのである。生亦た業を造り死亦た生を招き  
輪廻止む事なし。之を生滅に迷ふ衆生と云ふ。

四聖法界とは声聞、緣覺、菩薩、仏である。衆生が自己の心靈の根底に不滅の靈性具するを覺知し、仏陀先覺者の教を聞き生死の苦の源を諦らめ苦の本は煩惱であると煩惱を断じ寂滅涅槃即ち不滅の靈界を諦め此に入らんとするのには真空無我の道を修せねばならぬと竟に煩惱の生死の小我を滅して真空無我の涅槃不滅を証得したるを羅漢と云ふ。

天台には自己の心性本自百界千如一念三千具足するも開示して智慧現前する時は、  
仏陀と同じく証なれども次第六即あり。正しく信じ得る時は早晚仏性現前すべし。

若し人の心性を兩断せば滅と不滅との二性である。肉我の主として諸煩惱に依るの生命は必ず滅に墜つ。若し靈性に隨て生活せる者は永遠不滅に向ふ。前は迷者闇黒の生活後者は悟者光明の生活なり。前者のみ發展せるものには人は死すれば滅する者と謂ふ。永遠の生命未だ現前せざる故なり。靈性現前すれば自ら信認す自靈永遠不滅の真なる事を。昨日迄自己の不滅を信ぜざる者も若し一度大靈の光明に接して靈性現前

せんか忽ちに永遠不滅の真理を信じて疑はざるに至らん。

五八

## 宇宙の大法と目的

吾人は一切の万物と共に宇宙の大法則を離れて存在は出来ぬ。又宇宙の大勢力に由らずして生活は得られぬ。宇宙は何を目的として吾人を此の世に生死せしむるならん。古来宇宙には目的ありや無しやの問題に就て種々説あり。一切の人類の如きは本神より出でたるも一とたび神に背きたる罪は子孫まで遺伝し如何なる人も罪なきは無かりき。故に闇黒に墮する事免れざりき。己が罪を自覚して神の光りに救霊せられたる者は永く神と共なる事を得べきなり、との説もあり。

又宇宙を唯物的、機械的に見て居る学者あり。夫等は宇宙に神なるものありて其目的に世界を成し得るものでないと。又一方には宇宙は人智を以て測るべからざる神が存在し其神の法則に随ひ神の聖意に契ふ時は永遠に帰趣する事が出来るものである

と。

仏教に宇宙終局の目的が存するや否やと云ふに就て二あり。一は大法に随ふ時は成  
仏すると。他は宇宙の目的の如來の力に依て済はるゝとの二なり。

宇宙の大法に随順するは、即ち法性の理に随ふことにて若し法性の理に順ふ時は終  
には法性の中に証入することが出来る。換言すれば人は神から稟たる神の性を有て居  
るから神の聖意に随ひ神の真理に契ふ様にせば、神の国に入り神と共に生活する事が  
出来る、又更に換言すれば、人は本、真如から出た物であるから真如に迷ふて居る  
から、凡夫であるけれども、若し迷ひを翻して真如と一致する時は即ち仏であると。

仏法は本来、宇宙の大法である。真如より迷ひたる衆生を、本の真如の都に帰す真  
理法が即ち仏教である。

真如を如実に覚悟なされたのが即ち仏陀である。一切の衆生を真如の本覺に証入す  
るの大法は本然として常恒に存在して永遠に變易することなし。

法界等流の仏法は自然の法と共に、常に存在するけれども、夫れを知らぬが凡夫である。人仏の釈尊が此世に出やうとも、出でざるとも、決して替りはせぬ。唯だ常恒存在の真理を釈尊は自覚して、而して一切の人類を覚らしめるのである。故に經に有仏、無仏、性相常住とて宇宙の大法は本来常住なもので、釈尊が構造いたしたのではない。如来は只だ真理を自ら発見なされたのである。例へば地球の運動は、ガリレオの出世已前より、常然として運轉して居つたのである。地球は太陽を中心として私転公転して居る。其の理をガリレオが発見したのである。ガリレオの世に生れぬ昔から地球は運轉して居つた。其の如に仏法は本来常住にて即ち宇宙の真理が衆生と合致して衆生に正覚の光りを為さしむ。真理を発見なされたのが釈尊である。又釈尊は大靈の人格現として衆生を自覚せしむる法を教へんが為めに世に出でなされたのである。故に法華經に諸仏如来が此世に出現したる一大事の因縁は人々が本具して居る仏知見を開きて仏の正道に悟入せしめんが為に世に出で給ふたのである。禪家の

直指人心見性成仏とて、人々本具して居る仏の性が開顯する時は、自分が是仏である。と。すべて自力宗と云ふ方は吾人が本大靈と聯絡したる靈性を有て居るが自ら迷ふて此の靈性を顯はさぬから凡夫である。此の靈性が開顯する時即ち仏である。靈性を開發する理法を仏法と云ふのである。仏法の本体は宇宙大法にして、法爾法然として宇宙に存在す。此の眞理を一切衆生に開示せんが爲めに諸仏は世に出現し給ふ。

## 宇宙の目的

宇宙に目的ありと見るは宇宙の能力即ち働きの結果は必ず終局の目的に至ると云ふので大靈の力用から人格的の仏を出現して心靈界の太陽とし、斯く大靈には不可思議の力用ありて、人格的の仏として人類を撰して終局目的の靈界に帰趣せしむるを云ふ。此は大靈の力に基く。又被救者の方から云ふも大靈目的と言ふ力は恰も天の太陽の光を以て地上の動物植物を化育する如くに、如來は心靈界の太陽として、人類

の心靈を靈化して罪惡深重の凡夫を救靈して光明の生活に入らしめ、煩惱の罪惡を化して靈的に為し給ふ働きである。

淨土教の如く弥陀の本願力、一切の人類を光明中に摂して、斯心光に觸るる者は正定聚の位に入りて光明生活に為らしめ給ふと云ふ如きは大靈の目的を顯はす処の宗教である。

右の二教は前のは自己の靈性開發すれば、大靈と合致する故に、大靈と自己と一体であると悟つたので、後のは衆生は罪惡生死の凡夫であるが如来の大願靈力の光に靈化するときは凡夫の煩惱も化して靈態と為りて自ら心の内容が如来と同化する云ふのである。故に宇宙の法則と力能とが衆生の心を開き仏に化する力用である。

## 自己の伏能なる靈性を開發して正当に生活す

前に已に示弁したる一切衆生悉有仏性とて人々仏と成り得らるる性は本具有有す。



全(ぜん)体(たい)人(ひと)の性(せい)と云(い)ふものは、仏(ほとけ)に成(な)る性(せい)が本(ほん)来(らい)具(ぐ)有(ゆう)するものを開(かい)発(はつ)すると云(い)ふ立(り)義(ぎ)と、又(また)一(いち)方(ほう)には人(ひと)の性(せい)は本(ほん)来(らい)罪(ざい)惡(あく)のみで、神(かみ)の性(せい)は具(ぐ)有(ゆう)するものでないとい(い)ふ立(り)義(ぎ)とあり。前(ぜん)のに依(よ)れば、人(ひと)が本(ほん)来(らい)有(ゆう)つて居(ゐ)る靈(れい)性(せい)を開(かい)発(はつ)しなれば自(じ)分(ぶん)が即(すなは)ち仏(ほとけ)であると、是(これ)は前(ぜん)に自(じ)力(りき)宗(しゅう)と云(い)ふ方(ほう)なので大(たい)靈(れい)と靈(れい)性(せい)に於(お)いて合(が)致(ち)するを云(い)ふので、總(すべ)ての人(ひと)の本(ほん)性(せい)は罪(ざい)惡(あく)ばかりで神(しん)性(せい)具(ぐ)有(ゆう)せずとい(い)ふ方(ほう)は、自(じ)己(こ)と云(い)ふものを消(しょう)極(ごく)的(てき)の惡(あく)しき方(ほう)のみに見(み)て而(しか)して惡(あく)しき方(ほう)を消(け)して善(ぜん)に作(な)らしむる為(ため)なのである。

基(き)督(とく)教(きょう)では、人(ひと)の身(み)と心(こころ)と別(わか)けて人(ひと)の肉(にく)体(たい)は全(ま)く惡(あく)のみで救(すく)はるる物(もの)でないとい(い)ふ心(こころ)は本(ほん)来(らい)罪(ざい)惡(あく)では有(あ)るけれども神(かみ)に救(すく)はるる性(せい)は有(も)つて居(ゐ)ると云(い)ふてゐる。

仏(ぶつ)教(きょう)には両(りょう)主(しゆ)義(ぎ)ありて本(ほん)来(らい)具(ぐ)有(ゆう)して居(ゐ)る靈(れい)性(せい)開(かい)発(はつ)すれば成(じやう)仏(ぶつ)し得(い)ると云(い)ふのと又(また)凡(ぼん)夫(ふう)は本(ほん)罪(ざい)惡(あく)なれども、如(に)来(らい)の光(くわう)明(めい)に同(どう)化(け)せられて、仏(ほとけ)の意(い)を自(じ)己(こ)の意(い)と為(な)れば煩(ぼん)惱(なん)も靈(れい)化(け)して見(み)れば菩(ぼ)提(だい)である。洩(し)布(ふ)の実(み)も甘(あま)乾(かん)と代(か)るのであると。

靈(れい)性(せい)は本(ほん)来(らい)具(ぐ)有(ゆう)して居(ゐ)るけれども、開(かい)発(はつ)しなれば頭(あ)はれぬ。喩(たと)へば鷄(たまご)卵(らん)が孵(ふ)化(け)し

なくては鶏とりと成なる事ことは能できぬ。

靈性れいせいの卵子たまごを暖あためて孵ふく化するのが即すなはち仏法ぶつぽふである。如何いかに外部ぐわいぶから暖あためても自己じこに靈性れいせいが本来ほんらい具有いうして居まらぬものなればは仏ほとけに成なることは出来できぬ。

帰きする処ところ、人々ひと本来ほんらい具有いうの仏性ぶつじやうを開発かいはつしては仏ほとけと為なす大法たいほふが即すなはちは仏法ぶつぽふである。

本来ほんらい我々われはは仏ほとけの子こである故ゆゑ、親おやの恵めぐみに享うくる時ときは必かならず親おやと同おなじくは仏ほとけに成なることが出来できる。

華嚴經けごんぎやうには仏子ぶつし一衆生しゆうじやうとして見みるに如來にやらいの智慧ちゑあらずと云いふことなし。但ただし妄想執もうぞうしゆ着ちやくを以もつて証得しようとくせず。若もし妄想もうぞうを離はなるれば、一切智さいち、自然智じねんち、無礙智むげち即すなはち現前げんぜんすることを得う、又爾時またそのとき如來にやらい普あまねく法界ほふかい一切衆生さいしゆじやうを觀かんじて而しかし此言このごんを作なし給たまふ。奇哉きなるかな、奇哉きなるかな、此諸このもろ衆生しゆじやう何具いかんがくするに如來智慧にやらいちゑあり、迷惑めいわく不見みえず。我当われまさに教をしふるに聖道しやうだうを以もつて其れそをして永ながく妄想もうぞうを離はなれ自みづから身中しんちゆうに如來にやらい大智慧だいちゑ、仏ほとけと異ことな無なきを得えせしむと。

## 一切人類同一眞性

人生とは只個人性のみに非ず人類同一の本体を言ふ。同一類、同一種族のみに非ず、本、同一根底より出でて空間的にも広く世界に瀰蔓し、時間的にも数千万年の原始人類より現在の人類に到る迄、相互の聯絡は遠く其の元始まで遡て繋つて居る。我と彼と又一切の人類は其の相稟けたる性質、形の如く相異つて居るなり。人生れたるの形式に於ては同一である。仏教に於て、人類のみでなく一切衆生通じて其の本源は同一本源に出でて異途なし。人類は其の頭脳あり、四肢五官あり、五体の型は皆類型的に、又は内面の智力とか感情とか意志とかの如く矢張人間式に具つて居るけれども、其の頭脳より眼耳鼻舌手足等の総てに亘つて同一型式に有り乍ら、其の大小の分量とか、其の格好とか相容とか姿勢とかに於ては、相類似者も有けれども、之を詳かに検すれば人類無数億の人間中に一人として寸分も異らずと云ふ者はない。其の同一

形式に有り乍ら又其の型式と内容と性質とが一人として同じきは無い。爰に実に妙味がある。一切の人類、個々其の相容氣質等が悉く皆特殊のでありて、悉く共通たる同一人類は、人生たるの資格に於て同一である。其の相容氣質等が特殊のであり、何れが人生資格有つて、何れは人生資格無いと云ふ事は無い。人生問題実に妙なり。

## 人生の根底

人生は実に果敢なきもの、吾人は此の宇宙の大なるに對して其の小なる事、海上に突出したる一巖頭、実に小なりと雖も其の根底に於て甚大なる事無辺なるに比し、吾人の生命も実に五十年位の間なれども其の生命の本体は無限宇宙の大生命と云ふべき絶対の大靈を根底とす。人は其大靈の一小生命である。故に其の根底に於て、実に宇宙無限の生命より根を為して居るから、個体生命には、唯物質的生理学的の形の上のみ見ては、生命の眞理を知ることとは出来ぬ。実に生命ほど不可思議なるものはな

し。此の生命なるものは、仏教にて一面より言へば、実の寿者、命者なしで、五大仮  
和合の上の活動行程中に存在する一の勢力なので和合上の勢力の外に特に生命と云ふ  
一物が存在する訳ではないと、実に然り。此の生活機関の行動する勢力なる事は否定  
せざるなり。然れども生命の体、自我即ち精神は其の根底に於て大靈の其の原動と連  
絡せるなり。

## 人生の目的

人生の帰趣否人生の目的は先に述べた如く、動機から云はば自己の奥底に伏蔵せる  
性能を遺憾なく發揮して眞自我即ち靈我實現的に最善の努力するにあり。人が未だ  
奥底の靈性開發せざる程は其理想も又希望する処も相同じからざらん。然れども最高  
等に進み心靈開發し靈的生活に入る時は各自が自然に一致するならん。然れ共意識の  
階級よりまた意向の如何により人生の目的觀も必ず同一といふことは出来ぬ。人類も

一切衆生と共に生物であるから動物の進化した高等動物であると言ふも仏教では敢て拒まぬ。然れども人類としては万物の靈長とまで特等に発達したる身を受けしは実に幸福の極みである。此幸福と云ふは動物欲を恣に耽る爲めでなく自己の伏蔵を遺憾なく開發して真実の自我を現すことの出来ることを意味するにある。人類も動物である。若し人生帰趣の光明を自覺せざらんか只肉の奴隸となりて暗黒に墮するを免れず。

生物が極劣極小の状態より数千万代に渡りて専心努力の結果としました宇宙の大法に随順した生物が選択せられて、即ち伏能の靈性を顕現せんととのミオヤの法則に叶ふ系統が正統として幾多の階級を経て遂に人類に進化した。人類もまた大法に随ふ者は野蠻より文明に進みたり。

大なる聖意を自己の意として生活活動する者は実に幸福なり。今幸に人に生を得たり。仏教にては人生の帰趣を自覺して正しく其正道に就て実行するを一大事とす。

就いては今各自は自己の人生目的の問題に對して自答を試み給へ。自己は何の爲に生れ来り亦己が人生の終局の目的は那邊にあり哉と、凭の問題に對して如何に答なざるであらう。各自が自己の人生目的のいかがは人格の高低を量る秤ならん。人生觀の高尚なるものは随つて人格の高尚なることは言を俟たざらん。若夫れ人生唯營養生殖のみを以て目的と爲す如くならば如何に奢侈の生活なるも其は唯狡猾なる動物に過ぎぬ。然しながら人類も亦動物である故に他の生物即ち動物や植物と共通の生活なる点と又人類のみ他の生物と特殊なる点とあり。されば其生活の階級を區別して人類の特殊の方面を明さん。

## 生 活 三 階

天覆ひ地載せる地上に起伏生滅する處の生物は種々無量に分れたるも三類に區別して居る。一植物生活、二動物生活、三精神生活、此三階に通じて二の職分を有て居

る。一に營養二に生殖。前者は自家保存の爲め後者は種族保存を目的とす。草木と禽獸と及び人類も皆食物の營養を以て自分の生命を保存し亦其子を殖して種族を存続して行く点に就いては三階に亘りて共通である。若し唯營養を以て自家保存が生の目的と云ふならば大杉古松の如き植物には及ばぬ。彼等は居ながら營養分を取つて立派な体格を備へ然も何百何千年の生命を保存し其生殖と云へば何千万の種を造りて其種族を殖して居る。夫らの働きは亦も人間の及ばぬ処である。次に動物生活に至つては如何であるか、最も高等に進みたる獅子や虎の如きは人類の及ばざる程に發達せる立派な身体を以て而して日々何十斤の肉を啖ひ、衣服と云はば天然の毛衣を以て身に纏ひ料理を要せずして消化するに耐へ得る消化機能が備はつてをる。若し夫れ營養生殖是れ生の目的とせば人類いかでか万物の靈長と誇る所あらんや。然れ共人類の他動物に比して進みて一頭地を抽けるは精神生活にある。彼らを超越して天の特寵を被むるの榮典あるは此精神にあり。実に人類は他の動物よりは形態に於ては虚弱である。然れ



どもひと 共人は智慧感情意志等の意識の方面に於ては最も高等に発達して居る。若し生命が即ち身体ならば動物と人類と区別する処何かある。精神発達に於ては動物と人類とは天地の懸隔がある。更に動物と人類との精神に共通と特殊と区別して階級を明さん。

## 精神三階

精神否心理に人類と動物と共通なる所と特殊なる所とを別つて見れば仏教には心を四位に区別してをる。四位とは(一)肉団心(二)縁慮心(三)集起心(四)真実心。肉団心とは人の心を脳髓神経等の生理学また解剖学にて説明し得らるる範圍に於ける心の分。縁慮心と集起心とは心理学また認識哲学等に研究し得らるる方面から精神を見たのである。真実心とは吾人一切人類の心性は本宇宙絶対なる大心靈を根底として居る。故に若し真実心を開發して見れば自性清淨にして自性即ち仏であると云ふ如き大

悟徹底と云ふは肉団心や縁慮集起等の範圍ではない。自己の心体が絶対なる宇宙全一の真心たることを発見する所にある。凡夫は前の三位の心許りを自我として生滅の方面だけを認めて居る。永恒存在の真心を悟入することが出来ぬから人死すれば心識も共に断滅に帰するものと謂ふて居る。若し自性の中に真実心を発見することあれば自己は永遠の生命なることを覚悟して疑なきに至るのである。

心の四位を詳細に説明せんと欲すれども今便利に精神三階説に就て委しく演べんとす。此は骨相学家の頭脳三階級説を仮りて精神の階級説明を試みんとす。

三階とは下階天性。中階理性。上階靈性。骨相家は脳を四十二ヶ所に部を定めて仁慈性又は靈妙性等或は破壊性等と人の精神の働きを起す部分は脳骨中に定まつて居ると説いて居るが全く其の云ふ通り性が定つて居るとは今主張はせざれども便利上頭脳三階説を以て精神の階級を示して見たい。

頭脳の三階とは眼耳の位より下を天性と為す。是れ人類動物も共通の性である。眼

より上の額の中央に至るを理性又人間性と云ふ。此理性は他の動物には其働きの顕れず人間特殊の性である。額より上部を靈樞性となし是れ神人合一することを得る性である。初め天性とは天然性とも云ふ。亦生理的の精神作用を作す部分にて眼で物を見耳に声を聴き鼻に香を嗅ぎ舌に味ふ身に触るる等の感覺作用を為す所の性である。此の五官の働きは人類も他の高等動物も共通してゐるのみならず、還て人間よりは他の動物にして五官の却つて發達せるものあり。獸類にして闇を視る眼を有するあり。遠方の音響を聞き分る耳あり。また獸類は鼻の嗅覺の敏捷なることも逆も人の及ぶ処ではない。また口の働きの至つては口を以て料理を為し彼等が戦闘には牙類の武器が天然に備つて居る等の此肉体を養ふについては必要なる五官の働き及び其機械の發達したるは逆も人間の及ばぬ迄に進んで居る。

次に理性は特に人類のみが有つて居る性能にて人類は理性が發達して居る。理性は額に位したるは人類は他の動物に秀て眼より上部が豊富である。動物は額の部より

上部は乏しくして理性的精神の働きが出来ぬ所以である。人類の他の動物よりは五官の機能の如きまた生理上の機能に於ては却て柔弱であるに拘らず地上に最高等の位置を占めてすべての動物を制伏したるは理性の智慧の特別に発達して居る故である。自然科学に於て研究する所の物理上の理また生理学上の理等のすべての道理を理解することができるのは理性の働きである。更に物理学や化学の応用からして蒸気を以て種々の機関に用ひ、また電気を發して或は燈明としまた機関を運転する等有ゆる文明の機関は尽く人間の理性から發明され応用されて居るものである。

また天文地理等の自然界現象の事物を知りまた進んで万物の原理を或は思弁し弁証し觀察し判断し得るもみな理性あるからである。常識を以て我々人との社交を全ふし道德倫理を以て凭々の事は善また悪等の是非を弁へて道德秩序を乱さぬやうにするも実に是れ実行理性である。

人は理性を以て自分の動物慾を制伏し而して道として有るべきやうに自己の行為を

規定して行くのは人格具備したる人である。人類が他動物に超えて長たる故以は恣の如き精神上の理性といふ光輝赫々たる性能が存するからである。理性は能く物を真理を以て明に照す性なれば理性が能く発達したる人は道を誤ることがない。理性は明に真理を照し見るが故に我と人との間に於ても正しく見ることが出来る。他人の善きこと、己が悪きことも常に觀照し判断する故に公明正大をなす。理性の鈍き物は物の真理を照察することが出来ぬから動もすれば感情が闇黒に成りて無法な行動をなすに至る。理性が能く発達して実行上の理に明くしてそれが感情に及ぼして仁となり意志に及ぼして義となる。理性を以て自己を裁判して自己を完成ならしむるものは人格具備したる人である。

次で靈性は人類精神中最高等に位する部である。或は神の聖靈を感じ仏の智見を啓示せらるる。また神人融合の不可思議の靈境に達するは此性である。仏弟子の羅漢或は菩薩衆の最も靈たる所以は此性能が発達して神人合一の処にあるからである。

靈性は絶対無限の大靈に接觸する機関である。大聖釈迦神の子キリスト其の他の聖人衆の大なる金剛石の靈性に心靈界の太陽と仰ぐ所の眞神即ち無量光如來の大靈光が反映したる光輝が東西に一切の人類界の靈性を照したるが即ち宗教である。

また如來無量光は宇宙大心靈界の太陽にて永恒の光明は十方心靈界を照しつつあるも衆生は無明に覆はれて直接に其光明に接することが不可能である。そこで釈迦の此世に出現なされたのは東の山端に円満なる淨月輪をなして闇夜に彷徨ふ衆生の心靈を照し給ふことにも喩へられる。

永恒の大靈光は永へに照臨し玉へども靈性未だ開けざる人には接すること不可能。喩へば光は照すとも盲人には見ること能はざる如しと聖典に示されてある。

故に眞実に活ける信仰は靈性開發した後である。仮令宗教上の眞理を學說の上に能く學びて其理を理性の範圍に於て理解し得るとも、それは只言語文字の上に智識を得たので眞実の經驗とは云へぬ。現代世間に宗教の學者は沢山あるけれども眞実の宗教家

すなはち靈的實驗の宗教者が少い。學說といふものは古人の靈的經驗を言語を以て伝説したる物である。喩へば仏教の經典の中に最も盛に唱導されて居る部分は仏陀釈尊が三昧定中の經驗を文字に現されたのである。喩へば華嚴經に盧舍那如來の許に無量の菩薩等が集合して大方広經を説給ふ廣大無辺の蓮華藏世界にても是れ釈尊の華嚴三昧中の消息である。

自然界の事物の理は人の理性にて理解し且つ實驗し得らるるけれども心靈界の事實は靈性に依らざれば實驗また実感し得られぬ。然るに世人ややもすれば宗教の眞理を學問を以て實驗し得らるるものと謂へり。是甚だ誤謬である。若し夫れ心靈界の事實が言語文字の學問にて獲得さるるものならば教祖釈尊は本王宮に生れた悉達王子である。故に何も必ずしも家を出でずも宮中にありて天下の有らゆる學者を集めて研究の上へ一大宗教を興すべき筈なるに然らずして從來の學問をも尽く抛ちて山に入りて道を學びなされたのは學說の理解の如きは方便である宗教の眞生命は自己の伏藏を開き

て絶対の大靈光に接せざれば獲得し難きと覺りなされて入山学道の功果として靈性開發し無明の眠より醒めて本覺の大光明を得て永遠の生命となりて仏の大果を取なされた。已に演べた釈迦佛陀が自ら靈性開發して生死の夢より醒めて独り超然として光明の靈界に入りて從來の自己を願れば無明の眠に生死の夢を見て居たに過ぎぬ。然るに一切衆生は悉く人間の夢を食つて居る。憊の如き輩に対して覺醒したる靈界を説示するも決して信解することは不可能である。それよりは自分独り覺醒したる大涅槃に入るには如かじと謂ひなされた。然れども尚進みて考ふれば一切衆生悉く靈性を具有して居る。未だ靈性開發されざる故に五里霧中に彷徨うて居る。若し斯らを覺醒させたならば我と同一の仏と成ることが出来る。されば去來此よりは一切衆生を無明の眠より醒して光明生活に入らしめんと爰に佛陀は光明宣伝を開始なされた。是靈性を開發させる業を開いたのである。

斯の靈性が一切衆生の伏能の最深奥に潜んで居る。斯を開發して靈性を以て自我



と為す人は理性と天性とは其れに随ふことになる。天性は動物と共通にて理性は人の性である。故に理性を以て自我とする人は全く人格具備した人である。更に進んで靈性を以て我とする人は即ち聖者の伴侶にて即ち靈格と為る。

人はこの三性に亘りて何れも健全に発達したるものは個性の円満なる人格と云ふべきである。若し唯天性の肉体動物性のみ発達して理性開發せざらんか悪智慧の動物に過ぎぬ。さればこそ理性のみ発達して身体にして健全ならざらんか、筋肉的動作を充分に為すこと能はず。また理性としては完全なる人格備りても靈性の開けざる人は無宗教無神論に陥り人間としては立派な人物なるも天に對しては没交渉となる。未だ共に天を語るに足らざる人と言はざるをえぬ。また仮令靈性は開發しても理性にして一向働らきなきは常識に缺け世間に対しては面牆を為すの輩と為る。故に健全なる宗教の人を造るの目的は三性に亘りて何れも可成的に発達せしむるを要す。我教祖釈迦牟尼は実に完全なる道德者真の大聖者である。靈性は言ふまでもなく常識も身体も何も

完全に発達し給ひたることは推察し得らるる。

若し仏陀が常人ならば王宮に生て唯五欲の娯楽を貪り栄華を夢みて身体の労力に耐ゆるやうに筋肉は鍛練せられぬ筈である。然るに仏陀は苦行林に入りて或は炎熱に身を炙り断食に身を疲らせて有らゆる苦行を忍びて身心を鍛練したるは是れ身体之最も健全に発達したることを証すべし。また学業としては当時の群籍百家に亘り礼楽射御の技芸として学ぶに成らざるはなし。故に理性の健全にして常識に富めることは何を疑ふべけん。次に靈性の点に至りては耆宿のアララ仙やまたウドラ仙の如き数十年間に修行練磨の業を旬日にして已に達し夫等の究竟とする処の解脱は未だ終局にあらざること認め尚も進み進みて自ら無上の正覚を証得す。実に釈尊の如き完全円満なる聖格は人類ありて已来また比ぶべき賢聖なし。

仏陀釈尊は一切の人類をして完全なる人として有終の美あらしめ人生の帰趣を啓示し指導せんが為めに世に出現なされた。仏陀を世眼と称するは蓋し一切世間の眼とな



## 一 心 十 界

一心を本として心の理に十界を具し事に十界を造ると云ふのが天台の原則である。詳しく云はゞ心と云ふものは不可思議なもので宇宙一切万法の本体は一の心である。心の体は一であるけれ共其理に迷と悟と善と悪と起りて具さに十界の依正となり得べき性能が具有して居る。十界の性は本能に具有しては在るものゝ其中に於て事造と云つて地獄とかまた仏界とかの何れかの働きの強き方に造り出すのを心造とす。初に心具と云ふ方から説明す。

## 心 具

心具とは人々本来有つて居る心に各々迷と悟、善と悪とが各三等に階級が有つて合して十法界に成り得べき性能が具有して居ると云ふ義である。古来人の天から稟けた

性は善であるとか又は悪であるとか種々の相反せる説がある。例へば孟子は人の性は善であるとか、本来善であるけれども形氣即ち人慾の私のために性に戻つて悪を為すのであると説くかと想へば、又荀子の如きは人の性は全体悪である、故に若し天然の儘に放置せば我儘放題の悪人となる、依つて聖賢が教を以て矯正して初めて善と為るのであると。

今仏教の一説に依れば性具十界と云つて本来個々の心には迷悟善悪の性能が具有して居るのである。若し性に具して居らぬものが如何にして善なり又悪なりかに発現する事が出来やう。本来各自の心性は個々皆別々の様に見ゆるけれども其根底は深く宇宙一大心性とも云ふべき如来蔵性から出て居る故、宇宙間に具有する処の善悪迷悟十界が悉く具有して居ると云ふ。

又基督教の如きは他の動物の心性をば覺魂と云つて人類の心性を靈魂と名づけて、其心性が各別に神が作り成されたと言いて、全く人類と他の動物とは根本的に性が別

で有ると云ふのである。

仏教では然うでなく、根本的に遡つて見れば同一の心性にて理十界を具し性惡を具す等の語もある。

生物進化説などでも一切の生物界を通じて其の生物の根本に遡つて見れば同一の根底から出たのである。初めて地上に発生した生物は実に極小の生物であつたが漸次に進化して今日の文明の人類の如くに迄現化したのであるから、斯く進化したる人類といへども発生學に依て見れば初めて胎内に宿つた精蟲が卵子の中に入つた時には実に微少の物であると。其の微小の微粒に人と為り得べき性能が伏藏して居るのである。生物が何十年に種々の階級を経て進化したる歴史を人間の子と為れば儘か妊娠十ヶ月に其の階級を経て人の子と生るゝのである。然るに世には人間と劣等動物とが根本が同一であると云ふ事を疑つて否定するものがあるけれども、蓋し自分が精蟲と云ふ虫で有つた時分を知らぬ故である。矢張アミーバーに伏藏して居た本性が無数の時代

に進み進みて人間の身体や精神の相や働きと現化したのである。

尚進んで人々の心の内蔵に入つて研究すれば実に人の心ほど複雑な一切の雑多を有つて居るものはない。宇宙一大心性なる如来蔵性から縮少した一分子である故而も小宇宙である。宇宙間にありとあらゆる物の性が悉く個々の心性に具有して居る。

諸君自ら自己の内蔵を観給へ、迷も悟も善も悪も地獄から仏界に至るまで悉く具して居る。己が情に違反する境に遇へば忽ちに瞋恚の炎が胸中より燃え上る。是地獄の火の種にあらずや。嫉妬慳貪は餓鬼の心。愚痴賤劣は畜生の心。憍慢勝他は修羅の心。義務と同情とは人間の心。博愛公德は天上の心。靈妙の感應を信ずるは声聞の種。人生を覺つて見たいと云ふは縁覚の心。或る場合には他人を救ふ為には自分の身を忘るゝ事ある如きは菩薩の心。神尊を尊信する宗教心は是れ仏心である。此の如くに人々其の稟性に於て十界の中或は善に又悪に傾き易き性質はあるものの、其の奥底には十界の性が具有して居る。蓋し其の中に伏藏して居る者が人間としては一分も発現せ

ぬはない。

如何に悪方に發達したる人にして、も本仏の性を具す。故に性格を失ひ墮落の淵に沈んでも、自の良心の苦悶を感じ、亦は公憤義憤の禁ずる能はざるを感ずるあり。又性格墮落の中より、自愛の光を放つて、先非を悔ひ改めて善に移るあり。又人は善良だからとて、決して油断は出来ぬ。肉体の内には、地獄餓鬼等の肉慾我慾が、潛み居り或る機会に依りては働き出す。肉慾の餓鬼に溺れ、酒色に沈み、榮華の夢の中にも、内心自覚の仏心は心に針せらるる苦を感ず。故に人には、地獄より仏界に至るまでの性能を具して居るから、一旦墮落の底に沈みても、救済の資因なしと云へぬ。又如何に、大悟徹底したからとて、内にある酒色の為、に沈淪する憂がないとは云はれぬ。十界具有を、心具と云ふ。

## 心造

個々具さに十界の性を有つて居る。夫れで十界を造り出す。十界の性各自の一生涯



に亘て善惡迷悟何れか最も重き方に其の性格を形成するのである。即ち心の働きに依つて形づくるのである。其の個々の十界性具と云ふ中に性に遠近の二因がある。遠く根本に遡れば悉く同一の根底から起つた心性であるけれども、近くは各其の生理的の方より云ふても其の父母の遺伝要素が善惡種々の性質を先天の資性として有つて来て居る。生れつき有つて来た性質にも是には中々複雑な因縁から生れ出した結果である。父母の遺伝として両方より配合的の資性があらん。又妊娠の当時及び胎内の十ヶ月の間にも種々の助縁を被る。妊娠中の母の心の持ち方及び境遇より被りたる事情から母の心にも身体にも其の影響が及んで胎児の性質に及ぼす事は又少くない。若し妊娠當時が性の原因とすれば胎内中に稟けたる影響が助縁である。其の因縁に依て胎児が成て初めて産れた。而すると其の小児が生れつき有つて居る性質が原因となると其の後の家庭に又四囲の境遇に助成から薰習せらるゝのが縁となつて各其の性格を規定せらるるのである。其の因縁と云ふものの、其の主体は即ち自己の心にある因縁か

らして心の十界を作り出すのである。同一生物としても他の動物としても自分一代で種々に其の性格を變更は出来ぬ。彼らは多く本能的で犬は犬で犬の本能から家を守るとか、又狢犬の務を為るとか、鶏は鶏の本能を働く為めに居る。けれども夫れは其の動物にしても根本同一類の生物から種々の種族に変化したる勢に就ては種々の因縁から出来たに相違ない。夫れにしても心造と云へば確かである。生物の内的生活即ち心生命が原因でそれが境遇の縁に随つて応化して内的生命には急には変化せずとも外境の縁によつて漸々に變化する性を有つて居る。内的心は自己の活んと欲する衝動が生活の助けを与へる方に突進して、生命を保存する内在の原因と外境の縁とが相應するは益々繁殖する。又内的生命と境遇の縁の複雑なる関係上種々無量の動物と變化したのであると云はなければならぬ。

人類に於ては内的生命の心なるものが大に進歩して其の働きが非常に発達して居るそれで自我の心が善惡迷悟十界の性を具して意識的に何れでも自ら作り出す事の出来

る自由意志が現はれて居る。

華嚴經に心如二巧画師一造種種々五蘊一と云ひて心の働きは巧なる画師が鬼の影でも種々の動物でも人物でも宗教画でも心の欲する処に随つて運筆のいかんに依て其処に百馬百戦又は悪漢でも仙人でも仏菩薩の画図でも画き造り出すが如くであると。衆生が心一つから迷悟十界の身と心と世界とを造り出すのであると。又心造十界では有るけれども因縁から出来る結果である。人の生れ性に善又悪の方に何れにか傾き易い性質を有つて居る。其が性の原因である。例へば殺人とか竊盗とかの遺伝性の人が其に相応する境遇の縁に遇へば益々發達し其と反対なる慈善とか又施与とか云ふ事は出来難い。善にも悪にも其の生れつきの性に移り易くはあれども、然れども其根本的本性の一大靈性から受けた靈性を有つて居るから、大に自覚して熱誠を以て善の業に向つて改善に努力して敢て飽迄に習慣性を為せば第二の天性としては善人とならぬ事はない。

人の遺伝性習慣性又は性格や意志に人は規定せられて居る。夫れは普通には其の性格を変更する事は中々容易でない。仏教は性格や習慣性を超えたる根底の人々具有の仏性を開發して、眞実の自我實現的に自己を開發するのが目的である。自性の根底に横はる仏性は宇宙一大心靈と一体である。此の仏性は遺伝や習慣性でない、又外界から感ずる感情でない。又外の誘惑に應ずるものでない。此の仏性を開發してすべて意志も感情も智力も其の光明の下に使役せらるる時は皆仏子仏心仏行である。

心造が肝心である。人はいかに仏性具有して居るも其を發揮して實現し実行せざれば何にかせん。仮令黄金貴しといへども鋳垢より練出さざれば価値なし。仏心仏行を以て仏界を現はすが即ち目的である。

## 心十界を造る心の業

理に十界を具すとは心性所具の相を云ひ、造十界とは心の業即ち働きから十界を造

り出すを云ふのである。

華嚴經に若人三世一切仏を知らんと欲せば応に法界性は一切唯心造なりと観ずべしと。意は三世諸仏といふも本は同一の法界性より出たのであれば一切仏と共に十法界は悉く一切唯心から造り出したのである。心とは一切生物の内的生命のことで内的生命の業力から十界何れかの方面に向つて發達した。

本同一の心が何故に十界と分れて来ると問ふならん。十界性具の心の体は本は同一にて性に十界を具して居り内的生命なる心が強く働く方面に向つて發達す。

生物進化説にも之に例すべき点あり一切生物の根元は同一の原始的生物から出でながら一方に植物と成り一面には動物と成り、同じ動物にも羽毛鱗角の類より人類に至る迄種類無量に分れ而して原始的動物には左迄に種類特殊的に成つて居らぬが益々進化するに随つて動物の体形も性質も非常に懸隔するに至る。何にして動物は斯の如くに沢山の種類と為りまた發達の方面特殊的に分れたのであるかと云ふに、自然に陶汰

せられ雌雄の關係から淘汰せられた結果種々に分れて其特長の著しく現れて来た。要する処自己の活きるに利のある方に向つて働く、働く方に発達する。麒麟や駱駝の昔々沙漠の中で高き樹の葉を喰ん為に首を伸した其れが代々に亘りて発達した結果である。雌性の甘心を求むる為に尾の美を高調したる孔雀の尾雌性を引きつけんと鶯の声の働きが美音に進化したる如く、生に利する様に自然に淘汰せられて種々の方面に進化して居る。常に働かぬ部分は機械が痲痺して竟に全く其作用を失ふに至る。或る隧道の中に住むトカゲは闇黒中に在つて代々眼を使はぬ為生れ乍ら目が無いと云ふ人間の肉体中に代々使用せざる為に其働きが消失して了つた機能が沢山あると云ふ。例せば馬や牛の耳は随意に動くのは皮の下に随意筋の有るからであるが人間にも随意筋はあるけれども代々使はざる為に其機能が鈍つて其用を為すに耐へざるやうに成つた。身体中の部分としてもまた全体としても働くに随つて発達してまた進化す。仮令進化したる物も働かざれば竟に退化す。

人類の精神作用が他の高等動物のよりも遙かに進化したのは、代々に渡りて能く働かしたる結果である。然れども身体中の局部に於て機能が退化して使用に耐へぬ部分が百ヶ所もあるとのことである。斯の理は精神にも適用せらる。人の精神に十界の性能具して居るが善悪迷悟何にしても能く使用する方に向つて発達す。

因縁相待つて進化す。仏教に謂ゆる因縁果報の理は三世因果にもまた生物原因結果にも適用す。因とは衆生本具の心なる内的生命にある活んと欲する気。縁とは外界からして助成する力例へば米の種子に地や水やまた氣候の資縁を以て萌発し増長させるが縁である。

進化説に云ふ自家を遺伝するが因にて外界の応化力やまた適者生存の如きを資縁とす。自己の種子が外界の縁によりて成立するのが果にて、其働きが報である。此因と縁の關係からして一切の生物は進化したと云ひ得る。又個性としても同じ父母の遺伝要素を因とし、外界から受ける助成縁に依つて人格を形成せらる。個性を形成するに

詳しく研究せば因縁果報の理は如何なる事にも行はれて居る。例へば父母の遺伝配合的の資性から形成せられたる胎児についても、児の父が精子を構成する二三ヶ月の精神の持ち方の如何が精子に及し、若し其当時酩酊して脳が白痴漢の如くなれば其精子は白痴の種子となると。また妊娠十ヶ月の母の心の持ち方如何は胎児の性質に及すに預つて力ありと。其の父の精子と母の卵子とが因と縁と成りて而して胎児のカララと爲つた。其れが因として母の胎内十月の間に母の心の持ち方は言ふまでもなく言語動作も悉く胎児の身と心との資性を助成する縁となる。若し母が夫の挙動に対し憤懣嫉妬する如き、逆境に立ち憂怖する如き、すべて胎児の性に及ぼす。左様な因縁の結果として形成せられて生れた子が即ち生れつきの性因となり、生後の家庭また四囲の事情に助成せられ薫習せられて児の習性を形成する縁となる。当人の生れつきの性に善または悪に移り易い性質は持つて居る。されど外界からの刺激と薫習との助縁は其稟性を増長もさせるまた変更もさせる。進化論に云ふ応化である。仏教の因縁相応



と進化説の適者生存とは同一の理にて先天性即ち生れつき持て来た性質と外界から助成する縁の適當する時は容易に發達し然らざる時は困難である。

動物の本能。

心十界を造ると云ふも、幼稚なる動物の内的生命は意識的にまだ發

達して居らぬ。心の働きも本能的である。彼等は祖先代々に遺伝したる性能を固持し

て本能と成つて、犬は犬の、鶏は鶏の本能としての働きを有て居り、自己一代に

其本能的が變更する事は出来ぬ。一切の動物を通じて本は同一の根元から出た物なれ

ども種々の方面に進化したる結果は非常な懸隔を為すに至つた。進んで人類は内的生

活なる心が大に進化し、其働きが非常に發達し善惡迷悟十界の性が意識的に成り、十

界の内何れも自ら造り出すことが得らるる自由意志さへ觀らるるに至つた。

衆生は小法身。他教の言を借つて云はば小造物である。大親なる大法身が大造物主

である故に小法身も小造物主である。大法身の法則の下に小造物の働きとして自己の

子を生産することも出来る。また意識的にも大法身の法則の下に各自に自由を許され

て居る。父の意志に逆ひて悪を作せば三悪道の苦報を感じ、善を行へば三善の楽果を受く。父から受けたる靈性開かざれば自ら迷ひて六道生死の生を受け。人類已下の動物には自由意志未だ發展して居らぬ即ち本能に驅られて使役せらるる。人類は心の自由を許されて尚進んで父の聖意に随ふ時は生死の迷郷を立出で涅槃の光明界に帰趣することが出来る。

一切唯心造。衆生の根本心は如来藏性であり、分れ／＼て衆生心と為つて迷の凡夫とは為りしものゝ、根底は甚深である。人の現在の心は父母の遺伝あり又宿因あり遺伝性や習慣性の為めに規定せられて意志や性格を變更する事は中々困難である。然れども其性質や習慣性は本々宿世とか又父母の代に於て数々行爲したる習慣から起りて形成せられたる性格であるから、最根本ではない。云はば途中から薰習し数々働きたる結果である故に、百尺竿頭に一步を進めて自己本能の奥底に潜伏する仏性を發揮せんとして飽迄努力せば靈性焉ぞ開發せざらん。人々大杉と成り得らるゝ仏性てふ

種子あり。杉の種子から有ゆる勢能の有らん限りを發揮せしめば空を凌ぐ大杉と成る可き如く、自己の靈性の有らん限りを發揮せんが為に力行せば必ず成功すべきである。人生の目的ここに存す。

教祖釈尊は大菩提心を發し全身全力を竭して道業を成ぜんが為に奮心努力し給へり。幾多の魔をも一切の障礙をも悉く排除して靈性を發揮し給ふ。已に仏性の光明顯現する時は一切の行為として仏心仏行ならざるはなし。是心造諸如来である。仏教の目的はここに存す。衆生本具の靈性を開發し靈我を実現せんが為に終身努力すべし。

## 心変（十界は一心の變現）

一切衆生の心性は本如来蔵一大心から分身したる心性である。心ほど不思議なるものはない。此の心性に不變と隨縁の二面を有す。本性は不變であるけれど一面は縁に隨つて千變万化する。唯一の心性から十法界三千の依正色心悉く變現す。喩へば水は

本一なれ共随縁して變化す。湿度に有りて流動せる水も氷点已下の寒氣に遇はば忽ち  
 に凝つて固形体と爲り、又熱度に依りて蒸発せられて氣體となる。種々に變態すれど  
 も水の性は不変である。心は不思議、本形相なく、又定相なく、善に非らず、惡に非  
 ず、迷に非ず、悟に非ず、色に非ず、意識に非ず、一切分別の相を離れたり。斯くの  
 如きの心が随縁して種々無量の相に變現す。唯心の水迷ふ時は六道に流轉し、悟る時  
 は解脱して宇宙に遍滿し、氷つて三惡道の苦に閉ぢられ、溶解して四聖法界と變化す。  
 宇宙全一の心から變現して森羅たる万象尽十方無尽の世界と衆生と及び五蘊となり  
 十方三世に在りて世界と衆生と五蘊との三世間実に無尽不可說なり。悉く是唯心の  
 所變である。一切衆生の主觀と現はれたるも、又客觀の物象と現はれたるも、本は同  
 一の絶対大心靈より顯現したるものである。

尽虚空無辺の法界を悉く概括して十法界に収む。十法界とは地獄、餓鬼、畜生の  
 三惡道と、修羅、人間、天上の三善道と、声聞、緣覺、菩薩、仏陀の四聖法界とであ

る。此くの如く十法界は其の感ずる処の体と相と用と力と作とが身体と心意に各別々に変現して居るが其本は唯心の変作である。

炎々たる地獄の猛火に焼かるる苦劇癡狂にして火を吐き鉄鎚を以つて罪人を悩ます獄卒も心の変現である。餓鬼の飢渴、畜生の互害心より感ずる処の修羅鬪闘に身命を賭して戦ひ合ひ、人苦の街に泣きつ笑ひつ人事を営み人界の五欲の快楽に暇なく、四禅四定に静慮の喜楽を貪るも悉く一心より顕現したる相である。

無量の相好に無辺の光明を照らし衆宝莊嚴の淨土に在して一切菩薩の為に他受法楽を感じしめるは仏心の所現なり。

声聞二乗の神通自在に自然の虚界に逍遙して神通を現はし無為に遊びて物表に出づるも聖者心の所変である。

此の肉体を構造する物質の原子は魚鳥の身を組織したる原子が人間の食物となりて人の同化力に依つて人の肉となり、米や麦は鶏の飯と成つて鳥の形と変ず。同一の

物質原子があらゆる生物の身となり常に流転して止まぬ。心性もまた然り十界三世間の一切依正色心悉く一心の変現ならざるはない。三界六道の中に流転して変転極りなし是を一心の変現と云ふ。

# 一心に十界

一大如来藏心の一分心を衆生心とす。如来心と衆生心とは不一不異の關係を有す。一大如来心に具有せる方法を衆生心に悉く具有してゐる。此の心を二に分つて迷と悟とす。一体の二面である。迷ひて凡夫と為り悟りて聖者と為る。迷の中に善と悪とあり。各々三等に分つ。地獄、餓鬼、畜生を三惡道とし、修羅、人間、天上を三善道とす。此の六道は善悪苦楽無量に差別すれども六凡法界と云ふ。悟に三等あり。声聞と縁覚と仏菩薩とにて、大小階級ありと雖も四聖法界と云ふ。合して十法界とす。一つの心が迷悟の二つと分るる所以は、喩へば覺と夢との如し。迷者は靈性未だ

覚めず、無明に眠りて六道生死の夢を貪り、悟者は已に心霊眼醒めて涅槃光明界に安住す。然るに覺と夢とは心の体は本一にして相は同じからず。若し覺と夢とが全く別なれば夢中の事を覚えて後に記憶すること能はず。又相に於て同一ならず、夢中のものは覚めて何も見ず。この譬の如く、心は同一なれども凡夫は無明に眠りて六道生死苦楽の相を夢み、聖人は無明の睡より覚めて大覺の明境を知見す。仏陀釈迦出興し給ふ所以は、一切の衆生を無明の眠より醒して永遠の光明に入らしむるにあり。

略して十法界の相を説けば、六道の初三惡道。是に各因果あり。因とは今人間中に在つて精神的に地獄の業を結ぶ人、果は正しく六道の身を受けて居るもの。

一地獄。苦器と云つて六道の中に最苦中の苦たる処へ大地獄乃至一百三十六地獄あり。正法念經等に詳しく説いて居る。無間地獄の如きは若し仏陀が其苦相を眞実に説かば聞く人忽ちに血を吐きて死すとまで其苦の劇しきことを示されてゐる。罪の輕

重ちゆうによりてその受うくる処ところの地獄ぢごくに又また等級とうじゆうあり。逆惡ぎやくあく邪見じやけんの心意しんいを以もつて世よに害毒がいどくを及およぼし五逆ごぎやく十惡じゆあく等の一切さい惡業あくごふを造つくるものゝ逆惡ぎやくあく邪見じやけんの業ごふに依より倒さかさまに懸かけられ劇烈げきれつなる極ごく火くわに焼やかれ惡業あくごふの薪まきの在あらん限かぎりは消きゆることなく劇苦げきくを感かんず。

キリストキリストには世界せかい終局しゆうきよくの時ときに一切さいの死したいたいは生前せいぜん善惡ぜんあくの所作しよさに隨したがつて末日まふじつの審判しんぱんを受うく人死ひとしして中ちゆう有ゆうの靈魂れいこんは睡眠すいみん状態じやうたいを持ちして冥府めいふに在あり。世界せかいの終まはりひキリストキリストの再生さいせいに及およぶ靈魂れいこんは天地てんちに響ひびき渡わたる喇叭らつぱの聲こゑにて眠ねむりり覺醒かくせいし各自かくじは本もとの肉體にくたいにいり生前せいぜんの所作しよさ神かみの審判しんぱんを仰あふぎ永生えいせいと永死えいしとに定さだめらる。極惡ごくあくを犯をかし最後さいごの懺悔ざんげを以もつて改あらためざるものの靈魂れいこんは極刑ごくけいの地獄ぢごくに墮おとさると。

二餓鬼道がきだう。梵ぼんに薛荔へいれい哆たと云いふ。福德ふくどくあるものは山林塚廟さんりんちやうぼうしん神かみと作まつりて祀まつられ、福德ふくどくなきものは不淨ふじやう処じよに居をり飲食いんじきを得えずして飢餓きがに苦くるしみ又また鞭打むちうちちを受け河かはを填うづみ海うみを塞ふさぐ苦くを受うくること無量むりやうである。

此この鬼道きだうに種類しゆるい多おほし。今暫いましばらく二種しゆを挙あげば有財うざいと無財むざいとの二餓鬼がき。有財うざい餓鬼がきとは



其の業感の故に飲食は眼前に在り乍ら食ふこと能はずして苦しむ。人間に在りては我慾が昂進して病的となり、金錢は山の如くに積めども慈善若くは公共の爲めに供することは生爪を抜くよりも苦に感ずる輩である。又名誉権利位置を貪ぼるに常軌を脱して病的に陥入りたる族の如きも有財餓鬼の性格と云ふ可きである。

無財餓鬼とは肉慾の病的になつて罪を造りし漢である。己が活業を勉めず、唯酒に耽り色に荒み肉慾の習慣性が悪症と成つて人格墮落して其報にて無財餓鬼に落つ。或は嫉妬慳貪の餓鬼あり。或は黄金の奴隸となり肉慾の奴隸となりて人格を失ひたる輩を餓鬼性格と爲す。

畜生道。また傍生と云ふ。正しき人道の埒に列なる資格なくして傍に生くるもの羽毛鱗角及び一切の昆虫類に至るまで三十六位の種類に至ると。人中の傍生あり身は人間に受け乍ら其性横暴にして虎狼に等しきあり。情慾の正しき眼なき浮気なる禽に類するものあり。又公平なる理が判らず愚痴弊惡にして蠕動たる虫類に比すべき族あり。

り。形こそ人間たれ其心意と行為に於ては実に畜生に劣れるあり。また性猾しき猿に似たるあり。人を欺誑する魅すること狐の様なるあり。また蛇虺の如くに人に敵つくあり。毛虫の様に世に嫌はるるあり。

人生の目的は生を遂げ人格を完成するにありて唯營養生殖は人生の能事畢れりと自認するが如き漢は何ぞ夫れ動物と撰ぶ処あらん。

人生に永遠の希望を求めず、動物的精神生活に安んずるものは是畜生格、肉慾我慾の病的に陥れるは餓鬼格、邪見逆悪なるは地獄格、是を三惡道とす。

### 三 善 道

修羅道。阿修羅、此には無酒または無端正と翻ず。常に鬪諍を好み、怖怖極りなし。因中人たりし時猜忌を懐き心五常を行はずと雖も勝位を欲する故に下品の十善を作して此の道を感じず。

人中の修羅は本三善道の下品に位し、人格備はらざるに非るも高尚ならず、高尚なる理想なく、遠大なる希望なきが故に傲慢勝佗の心意より善を為す。

人は天稟の資格は相当なるものでも宜しく修養を經ざれば氣質の鋳垢除き難く傲慢自分勝手となり、人格の光輝は發揮せず。天稟の徳性も円満に成熟すること能はず。端なくも人格が完全し難い故に修羅格として偽善偽徳を以つて舌を銜ひ權威を追求し内に誠実なく外に賢善を装ひて人格は円満に遂げ難い。經に慘賊鬪乱誠実なく尊重自大にして己れ道ありと謂ふて横に威勢を行じ人を侵易し自ら挙高して人の敬難を欲し天道を畏れず実に降伏す可きこと難しと。

又三徳の内勇のみ重く智仁の缺乏する人格は修羅格と云ひ、楚の項禹、平の將門、奈翁の如きは是に属す可きものである。

又競争心の強き勝負を好み、動もすれば決闘を申込む性質の如きは是に属すべし。人道。人間とは全く人格具備したる者を指す。仮介頭天脚地、形は人類たるも人格

まだ具備せざる輩は人の眞価なし。人間は本能的動物ではない。陶冶訓練を要する生物である。例せば磁物中にも天然の儘に使用す可き石の類あり又人工的に琢磨せざれば光輝の発せざる寶石珠玉あり。人類已下の動物は本能に育発すれば宜しい。人類に至りては然らず、精神生活の中に理性が発達して而して理性の光を以つて自己の動物慾を抑制して自己を指導するが人類の特長である。若し人類が天然に放恣縱慢ならば悪智慧の動物に過ぎず。文明の教育の目的の主とする処は人に人格を具備させるにあり。

人類の精神には他の高等動物に未だ備はらざる処の理性的の智慧が具つて居る。人が一方に自然界に事理物理上心理上すべて百般の事物をよく認識し弁別し理解し得るは理性があるからにして、また理性は一面には常識となりて道德秩序も能く解りて己を修め他を恕り人道を履み行ふことが出来る。国民教育の主とする処は人道の基礎として人格を養成するにあり。故に教科書に挙げてある古来道德上立派なる人物は人

倫の標本として挙げたるものである。支那の孔子、希臘のソクラテスの如きは人道的の聖人である。日本の教育の中江藤樹伊藤仁齋貝原益軒二宮尊徳等の教訓を標榜するは斯らは人道的の指導者であるが故である。人生を永遠の光明界に導き靈格を具備させんが為ではない。人道としては今日の日本の教育も完全たるも人生最終の帰趣を目的となせる教育にはあらず。

天道。仏教に明したる天上界に六欲天、色界十八梵天、無色界の四天あり。六欲天とは世の公明正大博愛無私の有徳君子の帰趣する処にて善美を尽くしたる処、物質的の最高等なる快楽を感ずる処、色界は四禅にて世間的の公德私徳の上に最完全なる計にあらず、冥想観念を以て心靈を練修し思想を精練す。

## 十界の三位

十界に三位を立つれば、

一、宇宙全体の十法界あり。

二、人類中に十界あり。

三、個体に十界あり。

宇宙全体が一大法身として十法界を総括す故に人類の世界は其の分身なれば矢張り一法身として人類中に十界に性格を分ちて一切の人を包括する事が出来る。又各個人類中の一員即ち人類の単位である故個体に各十界の性を具して缺く事なけん。一心に十法界の三千の性相を具して備らざることなし。

個体は小法身である故に本より一心本具の十界の性を具して、一心は不可割の体であるけれども若し暫らく衆生心中の所具の十界を骨相学的に見れば如何。骨相学は人の精神の才智記憶とか觀察又は靈妙仁慈抗抵等の性能は脳髓中各局部に其の性能を受け持つて居ると云ふ。精神につき大脳を精神の坐所とするは心理学者及び生理学者も共に認むる処なれども、骨相学者は五臟五官の其職を掌るが如くに精神の仁慈公平

または観察等より理財の才能等各々其の働く各部は定つて居るとし、例へば仁慈性の部が能く発達せるものは慈悲心に富み理財性に豊富なるものは財政上の智能にたけりと頭脳全部を七部に分別し尚其の中の局部が合して四十二部に性能の本なる処を定めたり。

精神の本体は本来一体なれど其の働きを為す部を掌る処あるもまた妨げなし。例へ又四十二部に全く定りたる部はなしとしても人の性質に四十二性に分るる処の性分ある事は確実である。古来伝来の一心十界の図に、仏界を最上位に置き地獄を最下位に図したるも、図の如く宇宙間に古来何ら上下とする方位はなきものにして、表示的に十界の図を作りたる如く、人の脳髓に精神の作用の性を七分に若しくは四十二性の局部に定めて之に配する事は仏教の真言式に若しくは表示的として又經驗の事実としても個性の十界の性相と骨相家の四十二相と比例して配するは便利なり。

地獄—男女、破壊、抵抗、食欲、秘密、剛強。

餓鬼—男女、破壞、食欲、愛児、継続、秘密、畜財。  
 畜生—男女、食欲、秘密、畜財、抵抗。  
 修羅—自尊、名譽、高大、剛強、希望、殺戮、争闘。  
 人間—正義、名譽、觀察、仁慈、希望。  
 天上—仁慈、尊敬、公明、高大、希望。

次に靈格としては

靈妙、尊敬、想像、觀察、神秘、慈悲、高大は声聞性。  
 自尊、原因、想像、觀察、希望、公正、高大、考慮等は縁覚性。  
 仁慈、公明、自尊、尊崇、高大、剛強、……想像は菩薩性。  
 仁慈、神聖、公明、智慧、正義、審美、鑑識……

十界の性を四十二性を以て人類所具の性能を標榜したるものなれば人として此の四十二性本具せざるはなし。然れども最高等性が能く發揮して自余の性を悉く自ら如



理に指導し調御する自由意志を即ち解脱又は靈化と云ふ。

ヴントが道德の動機に四階級を立てたる如く、最高等なる理想の動機から出づる道德行と又自我の傲慢心の名譽的勝他の動機から出でたる道德行為とは、其行為又は其結果の如何を問はず其動機より派出所する心意に於て清濁同じ事とは云へぬ。

若し地獄的性格意志より行為するは四十二性悉く邪惡の内に使用す。希望自尊鑑識等すべて己が我欲の爲めに智慧は又惡智慧となる。若し修羅性格の動機よりすれば慈善事業を爲すも己が名譽の爲め又は勝他の目的からなす如く、人間的性格は人間としての常識良心。天上的動機は天人道の公明なる動機の道德的人格なり。

次に靈格としては声聞は無我真理を自我とする意志より出づる超人格にして自然即ち天の意は自己なれば仁慈公明其他一切の四十二性共に其に従ふて行爲す。

若し菩薩的性格は如来を理想として如来の聖意を自己とする故に、靈格の仁慈は人格的の動機に於て同じからず。如来が法性の理に随つて一切衆生を慈むが如くに

一切を慈み、乃至恋愛に於てプラトウの愛の如く靈的愛即ちすべてに超えて如來を愛するの愛となり、殺戮は先づ自己の一切の煩惱を殺し一切の惡邪悉く殺さんとし希望も自己の円満完成を願望し一切人類を度せんと希望す。

## 菩薩の願行 〓 帰趣

仏教にて靈的人生としての帰趣に志す人生を菩薩と為す。又仏子と云ふ。此の仏子のみ宇宙の大法則に則り終局目的に到達したる生である。仏子の大志願を起さざれば目的に到達する能はず。此の志願を大菩提心と云ふ。大菩提心とは仏子が起す仏心修行の意志である志願である。此に二面あり。一を上求又は願作仏心、二を下化又は度衆生心と為す。上求とは自ら完全円満なる靈格即ち仏陀にならんとの願望で、下化とは一切衆生と共に自他平等に完成せんとの慾求である。是れ即ち向上向下の願望である。此の志願が達し得らるるものならんやと問はば、願作仏心には衆生の根底に一

切衆生悉有仏性と云ふ人々本来仏になり得らるる本能を有つて居る事は已に述べた。然れども之を成就せんと欲せば此が成就さるべき法則に依らざるべからず。例へば人々は知識の性能は本より有つても教育等の助成を待つ如くに、衆生が仏性具有しても此が開発の法を待たざるを得ぬ。此が即ち仏法である。仏法とは人々の心性を開発して仏になす処の心理である。

宇宙全一の靈体より発生したる衆生の靈性を開發し円満に完成する理法は実は本来宇宙に其大靈力が流行して居る。之を宇宙大道と云ひ、宇宙大道とは仏教にいはゆる無上菩提である。無上菩提は常恒存在の大道である。

宇宙は一面から見れば自然法則と勢力とが存在して日月星辰の運行となり、一切万物の理法と為て常に流行して居る。また内面は衆生心靈界に流れつつある大道法が存在して、之を無上菩提と云ふ。又大菩提は宇宙に存在する大道法である。此の大道法に加はる衆生の意志を菩提心と云ふ。故に菩提心とは自己の心が実は全一如來心と連絡し

て居るもので如來の聖意を自己の意志となし自覺して之を實行するの志を云ふのである。

## 菩提心の根底

人類の生命は本低級の生物から進化したる生命である故に、動物の高等に進化したのは即ち人類であるとは進化論者の唱導する処である。仏教にも一切衆生悉有仏性とて、他動物と人類との根本的區別は立てぬ。然れども吾人類は動物の進化したるもの彼らが原始の低度のものから人類に至るまでの進化の爲には無数の代々に有ゆる全力を竭して努力したに相違ない。それは極小の生物にも靈性の伏蔵あり、また外界に之が進化を助成する機関あり、ついに人類に進化した。宇宙の目的は普通人間たるを以て終局ではない。普通人間は進化したる動物として肉体の生活を目的とす。故に唯肉の幸福のみで竭くとして居る。

此の肉体我の奥底に仏性でう靈性が伏藏して、此の靈性開發する時は即ち宇宙の目的と合致し、宇宙の大靈と自己の小靈は靈性開く時に始めて全く一致して、大靈と合致す。之を大菩提の体とす。菩提とは大靈の聖意である。

仏教は自己の根底なる靈性を開發して宇宙大道と合意するを宗とす。大靈より受けたる力を竭して靈我を実現せん為に努力すべきである。即ち向上の一路に突進すべきである。人生は靈の伏能を啓発する靈我實現主義とすれば、此が目的の為には全力を尽くして勇猛に精進すべきである。吾人の全体は大靈から賜りたる靈的實現の為の賜物である。宇宙大道法が即ち菩提心である。菩提心を以つて努力するは大靈の使命である。

大菩提心発らずば一切の行為は悉く宇宙の目的に対して何の功もなき徒勞とならん。靈的伏能啓発の為めには自己の艱難困苦も寧ろ甘んずべきである。吾人は大靈に負ふ所甚だ重担である。人生の終局の勝利は宇宙の大道に参加して大靈と共に永遠

の生命を得るにあり。如何に愚痴漢といへども大靈に繫れざる生命世にある事なし。  
 靈に伏能あり、至心碎励して止まざれば天稟の偉人より尚功をなすこと大なるあり。  
 世に大菩提心を起すほど大なる志願なし。故に大菩提心を発す人は現に小人なりと雖  
 実に悔るべからず。大菩提心なきものは現に偉人なりといへども恐るるに足らず。大  
 菩提心を起す人は其志に於て已に宇宙と共に大なり。昔印度に羅漢果を得たる聖徒  
 あり。其旅行に臨んで一の沙弥を侍者とす。聖徒自ら前に徒歩して沙弥を随行せしむ。  
 時に沙弥自ら念に願ずらく、願くは我大菩提心を発して、一切衆生を度して成仏せん  
 と。聖徒他心智を以て小沙弥の意念を知見して謂らく、此の沙弥現に今小なりといへ  
 ども其志願甚だ大なり菩提心を起して自ら作仏せんと欲す我は声聞の果を得たるも  
 遠く及ばざる処にして我是より沙弥に随行せんと。沙弥が携帶する包を取て自ら沙弥  
 の後に侍して随行す。時に又沙弥再び念ずらく菩提心を発して一切衆生を度すこと甚  
 だ難し、如かじ羅漢の聖果を得て疾く生死を出るにはと。時に聖者は又再び沙弥の志

念ねんを見て又また沙弥しゃみに随行ずりかうせしめた。其それは菩提心ぼだいしんを發おこしたるものは現在げんざいは小せうなりといへども将来しやうらいに於おて大成だいせいする未成みせい仏ぶつなりと責たつとむべきことを例れいしたるなり。

## 菩 提 心

人ひとは肉體にくたいから見みれば進化しんくわしたる動物どうぶつに過すぎぬ然しかれども大靈だいれいより靈性れいせいの密封みつふうを開ひらくべき宝鑰ほうやくを授じゆよ与よせられたる特典とくてんを得えたるに於おて万物ばんぶつの靈長れいちやうたり。若もし宝鑰ほうやくを以もつて靈的れいてき宝藏ほうざうを開ひらきて大靈だいれいの所有しやうを悉ことごとく授じゆよ与よせらるるに至いたらば實げに何なんの光榮くわえいか之これに過すぎん。菩提心ぼだいしんとは蓋けだし其恩典そのおんでんに浴よくしたしの謂いひである。菩提心ぼだいしんは宇宙うちうの深奥しんおうなる真善美しんぜんびの宮室きやうしつに昇のぼるの心こころである。菩提ぼだいは是道これどうと為なす。其その道どうとは極終ごくしゆうの宝城ほうじやうに到達たうたつするの大道だいどうである。世路せろに国道こくだう県道けんどう等とうありて、国道こくだうは帝都ていとの終点しゆうてんに達たつするの道みちであるが如ごとく、菩提心ぼだいしんは宇宙うちう真善美しんぜんびの極きよくなる大帝都だいていとに到達たうたつするの大道だいどうである。一切さいの行爲かういの結果けつくわは無上むじやう仏果ぶつくわすな即すなはち真神しんじんの位置いちに到いたりて極致ごくちとす。

菩提心は神の聖意と合一したる道徳的意志である。然らば即ち人生は無上道に到達するを目的とす。之を上求菩提または願作仏心と為す。次に下化衆生心とは一切衆生と自己とは已に根底に於いて同性なり。また無上の大道には彼我なし。故に公明正大仁慈博愛天の意を以て一切に及ぼす。また一切の衆生と自己と同一の菩提を体とす。若し我と彼と差別を見るが如きは是菩提心と云ふに足らず。己を愛する如くに他を愛す。共に無上の仏果を期す。其が為に最善の努力をなすが度衆生心である。





## 世の同朋諸士に告ぐ

良に惟みるに九蒼の無窮なる之を仰げば弥々高く之を觀ずれば益々深玄。天に日月星辰は其軌を逸せずして循環し、地には四時行はれ百物生ず、宇宙の無限なる中に過去遠々未來邈々たる中に我等が生るの微なる窈々冥々として自ら其の源を究め其奥を測るの智なく、天地万物に細大となく所有万物を統べ摂め、造化の妙用を觀ずれば之が根本となり又、其中心となり万物の帰趣する処の本体なかるべからず。換言すれば一切万物は何ものにか産み出され、又生育されて居るものなれば万物の一大本源即ち一の大ミオヤなくてはならぬ。我等一切衆生の大本の御親は何なるものなるか、無智なる我等知ること能はざりき。然るに我等が教祖釈迦牟尼は其のもと、本有法身無量寿仏より身を分けて此世に出給ひし聖者なるが故に自ら叫んで曰く「三界は我が有なり其中の衆生は皆我が子なり」との金言は我等一切の無明の迷子等のために一道

の光を与へ給へり。我等は教祖の御教によりて独りの大ミオヤの實在を信知することを得たり。誠に是れ喜びの極みならずや。釈尊は仮に人間の身を受け給へども實には本有法身無量寿仏に在ます。我等は教祖の御教に依て大御親を信知することを得たのみでなくミオヤの智慧と慈悲との光明に育まれて靈性開けて正しく父と子との最も親密なる因縁によりその光明の中に意義ある生活を遂行することを得る、實に是れ人生の最幸といふべきである。大唐の聖善導は我等と御親との間に親縁と近縁と増上縁との最も強き力を以て我等を助け給ふ所以を示されてある。我等は弱きものなれば大ミオヤの強き力を仰がざれば正しき道を進み行くことは出来ぬ。我等が先輩（諸々の聖者）はみな御親の光を享けて、世の為め人の為に偉大なる働きを以て御親の光榮を現はし熱誠に時代の人々を導きて光明の下に誘引なされた。

我等はミオヤを信じ、自己は実に聖子なりとの自覚を得れば一切の人々は悉く同胞であることを信解するに至らん。

尚、世の同胞諸士に告ぐ。我等は御親の子たると共に人の子である、人の子たる我等には染汚と迷妄と罪惡と苦惱との皮殻が強く、結び付て居る。是がために動もすれば自己を闇黒に引込れて惡道に陥れんとして居る。仏子としての聖き心は微にし却々顕れ難い。ミオヤの恩寵を被むり光明に靈化せられて疾く光明の下に生活し得るやうに専らミオヤの恩寵を仰ぎ慈光に導かれんことを期すべきである。

ミオヤは清淨と歎喜と智慧と不斷との光明を以て我等が暗黒より解脱し得るの御力を与へ給ふ。人生再び逢難し一日の光陰も皆是れ御親の賜なればこの尊き光明の中に生活を得る吾人は希くは全力を竭して天分を果さんことを。

